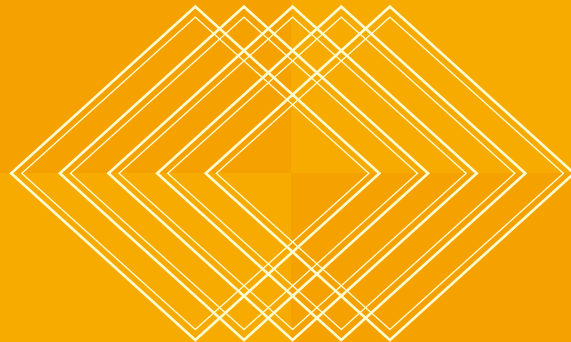


第10回 東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」 FD・ワークショップ

— 報 告 書 —



平成29年2月

東北大学学務審議会
高度教養教育・学生支援機構



東北大学

第10回東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ 報告書発行にあたって

東北大学高度教養教育・学生支援機構副機構長
総長特別補佐（教養教育担当） 安藤 晃

平成28年11月10日に開催しました第10回「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップの報告書を刊行するにあたり、ご挨拶申し上げます。

昨今の大学を取り巻く環境の変化のなかで、あらためて大学における教育はどうあるべきか、中等教育から高等教育への接続についてのあり方などが真剣に議論されてきています。大学で何を学ぶかは学生にとっても教員にとっても大きな課題ですが、個々の思考に重点を置く能動的学習（Active Learning）を自発的に行うような「学びの転換」があることは間違いありません。大学での学習では、先生に教えてもらうという受け身の姿勢では十分ではなく、自ら理解し自分の考えを提案していく能動的な姿勢が重要です。

最近では車の自動運転や囲碁将棋での電腦勝負などAI技術の進展に伴うディープラーニングの発展が取り沙汰され、将来、単純作業はすべて機械化が進むともいわれています。コンピュータの頭脳と人間の頭脳で何が異なるかといえば、前者は最適解を求めることは出来るがその意味付けはわからないという点にあります。人間の頭脳でこそ、いろいろなものに意味付けを与えること、価値を見出す事ができます。このような時代を迎えつつあるなかで、次代を担う人材を育成する義務が大学にも求められています。

大学に入学した1年生に対して、教員からの一方的な専門的知識の伝授を行う旧来型の教育ではなく、自ら考える力、仲間と議論しながら課題に取り組み、解決に導いていく能動的な学習を通じ、「思考を活性化する」する能力を獲得することは、これからの大学での学習だけでなく、社会に出てから様々な課題に立ち向かうためには必須となっています。

「基礎ゼミ」は、本学に入学した学部1年生が参加する少人数ゼミ形式の授業ですが、実施にあたっては本学のすべての学部、研究科、研究所の先生方から担当者が選抜され、文系から理系まで150を超える数多くのテーマを設定し、実施されています。入学した学部の枠を超え、興味をもったテーマに対して参加した学生同士が活発に議論し、実習に取り組んだりしながら創意工夫を行う点に特徴があります。総合大学としての強みを活かし、進学した学部の枠にとらわれず、複合的な視点を持つ大事さも重視しています。さらに、「基礎ゼミ」につづく「展開ゼミ」では、専門実習や研究室ゼミへと内容を深化させた実習内容となっており、社会における様々な課題に対し取り組み、自らの意見をまとめ、主張し、議論しながら解決策を見出していく能力を身につけることを期待しています。

「基礎ゼミ」「展開ゼミ」の実施にあたり、本科目の趣旨を共有し、実効あるゼミとするために有用なノウハウなど優れた実践事例の報告を毎年継続的に行っています。さらに基礎ゼミ成果発表会を開催し、優れた発表、優れた取り組みに対して表彰する制度も行われています。本報告書を参考に、教員と学生がともに創る授業にむけ、更に新しい進展がなされることを願っています。

第10回 東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ

日 時 : 平成28年11月10日(木) 13:00~17:00

場 所 : (全体会) マルチメディア教育研究棟2階 M206
(ワークショップ) 講義棟C棟4階 C405, C406, C407

内 容 :

1. 開会挨拶 学務審議会副委員長 安藤 晃 13:00
2. オリエンテーション
「全学教育における基礎ゼミ及び展開ゼミの意義と実施に向けて」 13:05
学務審議会基礎ゼミ委員会委員長 芳賀 満
3. 講演
「配慮を要する学生の理解と対応」 13:30
学生相談・特別支援センター准教授 中島正雄

~~休憩10分~~
4. 基礎ゼミ実践事例の報告 14:00
 - ① 「人体の構造と機能」～実験・実習型ゼミ実践事例
医学部・医学系研究科講師 尾形雅君
 - ② 「Interactive Short Course in Marine Biology」
～フィールドワーク型ゼミ実践事例
高度教養教育・学生支援機構准教授 Martin ROBERT
 - ③ 「ロシア研究入門」～演習型ゼミ実践事例
東北アジア研究センター助教 塩谷昌史
5. ワークショップ—学生の主体性を育む授業方法— 15:10
A～Cグループの3グループに分かれ、事例報告者を交えてグループ作業を行う
Aグループ: 尾形雅君講師
Bグループ: Martin ROBERT 准教授
Cグループ: 塩谷昌史助教
6. 発表・質疑(各グループの成果発表) 16:35
7. 閉会 17:00

全体会司会: 基礎ゼミ委員会委員 中川 学

主催: 学務審議会 高度教養教育・学生支援機構



開 会 挨拶
学務審議会副委員長 安藤 晃



オリエンテーション
学務審議会基礎ゼミ委員会委員長 芳賀 満



講 演
学生相談・特別支援センター准教授 中島 正雄



基礎ゼミ実践事例の報告
医学部・医学系研究科講師 尾形 雅君



基礎ゼミ実践事例の報告
高度教養教育・学生支援機構准教授
Martin ROBERT



基礎ゼミ実践事例の報告
東北アジア研究センター助教 塩谷 昌史



研 修 風 景



ワークショップ風景

1. オリエンテーション

「全学教育における基礎ゼミ及び展開ゼミの
意義と実施に向けて」

学務審議会基礎ゼミ委員会委員長 芳賀 満



第10回 東北大学
「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ
2016年11月10日(木)



全学教育における 基礎ゼミ及び展開ゼミの 意義と実施に向けて

東北大学
学務審議会 基礎ゼミ委員会
委員長 芳賀満
(高度教養教育・学生支援機構 教授)

本日の「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ ～プログラムと目標～

- このオリエンテーション:「全学教育における基礎ゼミ及び展開ゼミの意義と実施に向けて」
→ 基礎ゼミ及び展開ゼミの趣旨と実施上の留意点を確認
- 講演:「配慮を要する学生の理解と対応」
高度教養教育・学生支援機構 学生相談・特別支援センター中島正雄准教授
→ 学生対応の諸問題を認識
- 基礎ゼミ実践事例 3つの報告:
本年度の基礎ゼミ(タイプ別)担当教員から成果報告
→ 授業実践の方法・工夫などを学習
- ワークショップ:
→ 基礎ゼミ担当教員の実践例をもとに、
「学生の主体性を育む授業方法」と授業実践上の手法や工夫を共有化

特に高い授業評価の
3つの優れた基礎ゼミ授業

基礎ゼミ

- 少人数、「課題解決型」授業
- 基礎ゼミの原型は、2002年度に開発。
- 新入生全員を対象
- 学部教員のみならず、附置研究所の教員も担当
- 授業形態は、従来の教員が講義し学生が座って聴くという「座学型授業」でなく、設定された課題を学生が自ら主体的・能動的に行動し解決策を考え、他人に対しレポートと口頭発表で表現する、新しい「課題解決型」タイプ
→ 協調力、理解力、能動的行動力、表現力、説得力などの向上
- 従来の授業形態と異なるので、教員は授業技術の習得が必要。
→ 本日のFD・ワークショップ
- 多くの大学で少人数授業が実施されているが、全学の学生と教員が参加する形態で行っているのは東北大学のみ。
- 文理融合型であるのも、本学の特徴。
- 新入生の99パーセント以上が受講。
- 約170の基礎ゼミ、1つ当たりの受講生は平均15人。
- 授業評価は大変に高い→展開ゼミも開講へ。

東北大学全学教育の構成

基幹科目

人間論・社会論・自然論: 専門分野の如何を問わず、豊かな教養と人間性に裏付けられた知的探究心を養う

展開科目

人文、社会、自然の諸科学に関する基礎的知見、学際的視点を身に付け、専門教育へと展開する知的基盤を養う

共通科目

「基礎ゼミ」「外国語科目」「情報科目」「保健体育科目」等
本学学生ならびに現代人としての基本的素養と技能を学び、能力や技能を 自己開発するための起点を形成する

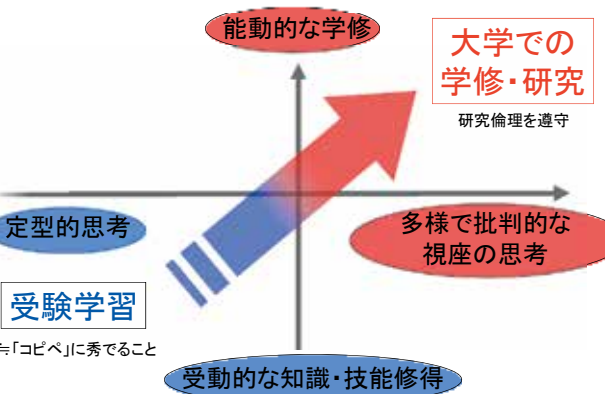
今年度から



「展開ゼミ」は

- 「基礎ゼミ」から発展的に生まれた科目
- 1年次前期の「基礎ゼミ」での入学後半年間の「大学での学び」の経験をもとに、1年次後期に「展開ゼミ」を実施。
- 「基礎ゼミ」で育まれた主体的な学修姿勢をさらに高める科目
- 「基礎ゼミ」と同様の教育手法と目的
→ 演習・実習・実験・フィールドワーク等のアクティブ・ラーニングを取り入れた20名程度の少人数教育の授業形態
→ 今日のFD・ワークショップには「展開ゼミ」をも含む。

東北大学のめざす全学教育、 特に基礎ゼミ、展開ゼミ～学びの転換



大学での学修・研究
研究倫理を遵守

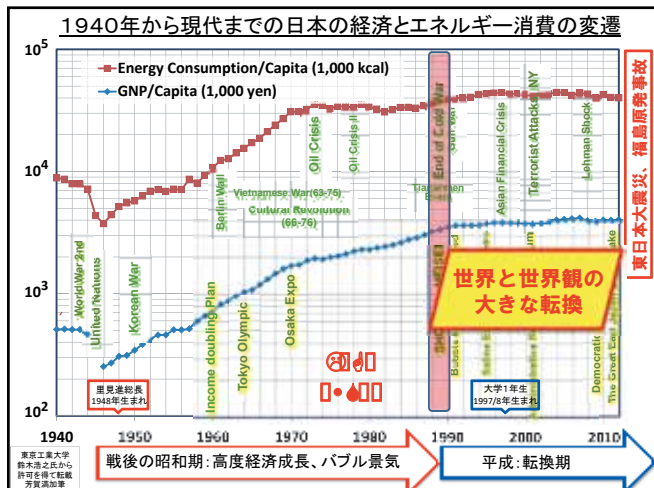
多様で批判的な視座の思考

能動的な学修

受動的な知識・技能修得

定型思考

受験学習
⇒「コピペ」に秀でること



小型化・密集化、有限化する世界 ～1990年以來のここ20年間ほどの巨大な変化～

1. 人口増大
 - ・1990年 52.79億人→2013年 71.25億人、1.35倍に。特に発展途上国で増大。
 - ・(参考)旧石器時代末期の紀元前1万年の人口は現在の1パーセント以下
 - ・(参考)ギリシア・ヘレニズム時代の世界人口は1.5億人程とされる
2. IT技術の革命的進展
 - ・コンピュータの処理能力: 20年間に100万倍に
 - ・世界規模での情報網の発展と様々な情報の同時共有
 - ・(参考)農業開始などの「新石器革命」は3000年以上かかる
3. 東西構造の崩壊～ソ連崩壊、中国・韓国発展
 - ・経済システムの統一
 - ・世界規模での資源獲得競争の激化
 - ・イスラム世界の進出
 - ・多様性の尊重、様々な分野での対象の相対視化の進展
4. 地球システムの解明の進展と
地球システムの脆弱性と有限性の認識
 - ・温暖化現象などの地球規模での気象研究などから

References:
 Biraben, Jean-Noel, 1980
 Durand, John D., 1974
 Haub, Carl, 1995
 McEvedy, Colin and Richard Jones, 1978
 Thomlinson, Ralph, 1975
 United Nations (UN), 1973
 United Nations, 1999
 U.S. Bureau of the Census (USBC), 2002

東京工業大学
 鈴木浩之氏から
 許可を得て転載
 芳賀満朗訳・加工・加筆

ここ20年程の教育上の変化 ～教育から学修へのパラダイム転換～ ～知識中心主義教育から課題対応能力育成へ～

- ・ 1995年頃、アメリカ(=人類社会の先端実験室)で始まる。
 - 「大学の目的は学生の学習を生み出すこと」
 (Robert B. Barr & John Tagg in Change 1995)
- ・ 能動的学修(アクティブラーニング)(中教審)
 教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、
 学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。
 学修者が能動的に学修することによって、
 認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。
 発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、
 教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。
- ・ 従来の知識伝授型教育(これも重要で有効)と
 新しい能動的学修(「基礎ゼミ」及び「展開ゼミ」)

本田由紀

『多元化する「能力」と日本社会』
 NTT出版 2005年

- 近代型学力 → ポスト近代型学力
- 基礎学力
- 標準性
- 知識量・知的操作の速度
- 共通尺度で比較可能
- 順応性
- 協調性
- 生きる力
- 多様性
- 意欲・創造性
- 個性・個性
- 能動性
- ネットワーク形成能力

10

Actively Teaching Teacher から Actively Learning Students への転換

- ・「今まで教室の中で一番活動しているのは教師で、生徒は退屈そうに教師の話を聞いているだけ」
 (「反転授業」(flipped classroom)の創始者の一人である第一人者のAaron Sams氏の2014年5月24日の東京大学での講演から～高度教養教育・学生支援機構の杉本和弘先生からのご教示)
 - ・ 一生懸命に準備して、精一杯に話す授業が失敗する経験・・・
 - ・ 教室で一番勉強しているのは教師・・・
 (高度教養教育・学生支援機構の杉本和弘先生からのご教示)
 - ・ 教員は教えることを最小限にして我慢して、
 学生が主体的に積極的に学修する工夫を
 - ・ 「基礎ゼミ」「展開ゼミ」: 「教員が一方的に教授する講義形式」
 → 「学生の主体的能動的な学修をうながすゼミ」が望ましい
- ～是非、「基礎ゼミ」「展開ゼミ」で実施、場合によっては他の授業へも応用を

東京大学の「初年次ゼミナール」

- ・ 2015年度から全1年必修で導入。
- ・ 「文系では従来の基礎演習を発展的に改編・刷新し、理系では新たにその科目を導入し、各教員の専門性を生かしながら、どの専門分野でも必要な基本的研究技法を習得するもの」。
 『東京大学新聞』(2014.6.17 日号)石井洋二郎教養学部長へのインタビューから
- ・ 「ひとりよがりな知識の集約に終わる危険性」を避け、「学問全体に開かれたはつきりとした共通基盤を与える」。
 - それがないと、昨今のスキャンダル。
- ・ 学問の共通基盤を与えるもの＝初年次ゼミナール

11

東北大学の「基礎ゼミ」

- ・ 少人数、学問の基本的技法と共通基盤の獲得。課題解決型授業
- ・ パークレー大学^(70人以上のノーベル賞受賞者輩出)の初年次ゼミをひとつの手本に。
- ・ 基礎ゼミの原型は既に2002年度に開発。

- ・ 新入生全員を対象
- ・ 学部教員のみならず、附置研究所の教員も担当

多くの大学で少人数授業が実施されているが～

- ・ **文理の学生が融合して文理融合型ゼミに参加するのは、東北大学のみ。**
 - － トランスサイエンスの時代
 - － 所属学部を越えた友人の輪
- ・ **全学の学生と教員が参加する形態で行っているのは東北大学のみ。**
 - － 新入生の99パーセント以上が受講。

→真に能動的な学修、多様で批判的な視座の思考力の涵養

対文科省
部外秘

「雪雪の功」(『雪書』)
(=高級官吏への
出世)なんぞ屁

人文学
＝「夏炉冬扇」
(要らぬ役立たずのもの)

学問、
あるいは教養教育
(全学教育)
＝尻からぬける
ほたる

高等教育政策に関わる最近の一部の兆候

- ・ 安倍晋三首相 2014年5月6日、OECD・閣僚理事会・基調演説
「だからこそ、私は、教育改革を進めています。学術研究を深めるの**ではなく**、もっと**社会のニーズ**を見据えた、もっと**実践的な、職業教育**を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています。」
(http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2014/0506kichoken.html)

- ・ 文部科学省 実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議 (第1回) 2014年10月7日
(株)共創基盤代表 富山和彦氏の私見
 - ・ **「ごく一部の「トップ大学」以外はすべて「職業訓練校化」すべき**
 - ・ **Globalの世界に通用する人材を輩出できる大学は、そのような領域に特化した教育を行い、それ以外は「生産性向上に資するスキル保持者の輩出」に力を注ぐ「職業訓練校(Local型大学)」とすべき。**
 - ・ **そこで重視されるのは、学問より「実践力」**

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/index.htm)

高等教育政策に関わる最近の一部の兆候

平成26年(2014年)10月7日
文科省「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議」
東大、弁護士、経営コンサルタント 富山和彦氏のプレゼンのp.7
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/shingi/slidefile/2014/10/7/1352719_4.pdf

L型大学(含む専修・専門学校)	
文部科学省	シニオスビズ、実学
経済産業省	マイケル・ペーラー、就職
法務省	憲法、刑法
厚生労働省	看護力、漢字力

**「社会性」
「換金性」
の重視**

高等教育政策に関わる最近の一部の兆候

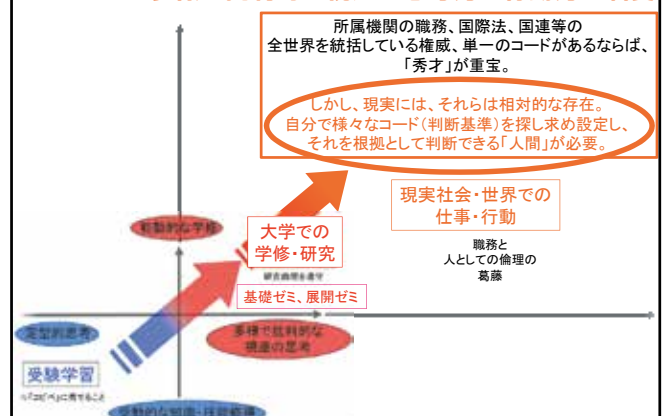
～「6・8通知」～

国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて
平成27年(2015年)6月8日 文部科学大臣決定

- ・ 文部科学大臣が国立大学法人等の第2期中期目標期間終了時までに**行う組織及び業務全般にわたる見直しの内容を、国立大学法人については別紙1、大学共同利用機関法人については別紙2のとおり決定する。**
今後、第3期中期目標・中期計画が本決定に沿った内容となるように国立大学法人及び大学共同利用機関法人に求めるとともに、所要の措置を講じることとする。
- ・ (別紙1)国立大学法人の第2期中期目標期間終了時における 組織及び業務全般の見直しについて
 - － 第3 国立大学法人の組織及び業務全般の見直し
 - － 1 組織の見直し
 - － (1)「ミッションの再定義」を踏まえた組織の見直し
 - － (前略)特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、**組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする。**

文科省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/062/jyokoku

→真に能動的な学修による 多様で批判的な視座の思考力と行動力の涵養



Adolf Otto Eichmann
(1906-1962)



ゲシュタポ・ユダヤ人課課長・親衛隊中佐
ユダヤ人問題の最終解決
"Die Endlösung der Judenfrage"
ホロコーストとしてユダヤ人500万人虐殺。
イスラエルで裁判:「職務に忠実に従っただけ」
思慮、良心、想像力を欠いた組織の「歯車」
「悪の凡庸さ」(ハンナ・アーレント)

「一次的人間」
(One-Dimensional Man)
=専門家としての
ポジションが、
活動のレンジを
1つのコードで規定
→ユダヤ人を殺すべきでないという
他の多くの多様なコードを参照しない。

杉原千畝
(1900-1986)



リトアニアのカウナス領事館領事代理として
しかし外務省の訓令に反して
ユダヤ系難民に大量の日本通過ビザを発行

組織人としての**服務規律**と
人としての**倫理**
との間の葛藤

基礎ゼミ、展開ゼミ、
双発教育の目的
様々なコード(判断基準)を
自分で探し求め設定し、
それを根拠として判断できる人間

専門とそれ以外のコードや文脈との間の
「往復」の訓練が必要
(ユネスコ
世界記憶遺産が必要)
申請中

「若冲」

「(「戦争」の書は非上戸)」

学びの転換

今日の第2部のワークショップ

—学生の主体性を育む授業方法—

Aグループ: 「人体の構造と機能」～**実験・実習型ゼミ**実践事例
医学部・医学系研究科 講師 尾形雅君 先生

Bグループ: 「Interactive Short Course in Marine Biology」
～**フィールド・ワーク型ゼミ**実践事例
高度教養教育・学生支援機構 准教授
Martin ROBERT 先生

Cグループ: 「ロシア研究入門」～**演習型ゼミ**実践事例
東北アジア研究センター 助教 塩谷昌史 先生

- 各グループでは講師に対する質疑応答の後、
討議によるグループ作業を行う
～仮にグループ分け。ご希望があれば別のグループへ適宜変更可。
- 課題:基礎ゼミにおいて**学生の主体性を育む授業方法として**、
「**良い手法3例**」と「**改善を要する手法3例**」をまとめ、全体会で発表

ゼミ実施に当たってのいくつかの注意点

**「基礎ゼミ」・「展開ゼミ」の
成績評価と授業の質保証**

- 学生による授業評価アンケートの結果(平成25年度前期セメスター～)
 - 基礎ゼミ授業科目は全般に大変に高い評価を得た。
 - だが、「成績評価法の説明」については肯定的評価が平均を下回る。
 - 学生に対して教員が成績評価法を明快地提示することが必要
- 授業としての**目標水準を明確に設定**した上で成績評価法を決定
- 教員がその**成績評価法**を学期冒頭に**学生に明瞭に提示**
- 以て基礎ゼミ・展開ゼミの授業としての質保証を図る。

**基礎ゼミ
実施に係わる経費について**

- 【基礎ゼミ実施経費支出の注意事項】
- どうした場合であっても、**学生に立て替えさせることは禁止**
 - 切符等は、
 - 「事務が購入する」か、
 - 「教員が立て替え払いする」。
- なお、学生の車の使用も禁止。
- その他、不明な点、わからない点などは、事務と相談して下さい。

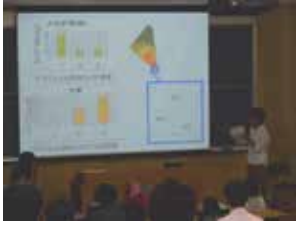
学部学生への 研究倫理の教育

(大学院生への教育は研究室単位で可能)

- 「**基礎ゼミ**」授業の中で研究倫理の説明をお願いする可能性がある。
- なぜ「基礎ゼミ」なのか。
 - 「受験勉強」＝「コピー」に秀でる事
 - 「研究」＝「研究倫理」の遵守
- 「**学びの転換**」を図る授業の目的に沿う
- ほぼ新入生全員が受講する科目である

基礎ゼミ成果発表会 (毎年9月末)

- 基礎ゼミで学んだことを公開発表
- 学生が主体的に運営



口頭発表



ポスター発表(1週間)

ご清聴 ありがとうウサギ

大震災を忘れず、
未来へ



ありがとうウサギ

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 芳賀満
mhaga@m.tohoku.ac.jp

「基礎ゼミ」実施に当たっての留意事項

1. 受講者の決定について

新入生は、大学から入学前に事前に送付される「基礎ゼミの手引（シラバス）」を参考にして、受講を希望する課題を第5希望まで選び「基礎ゼミ受講希望届」を入学後のオリエンテーション時に提出します。この「基礎ゼミ受講希望届」を基に、電算処理によってクラス分けを行います。

また、2年生以上の学生が受講を希望する場合も同様のクラス分けを行います。

クラス分けの結果については、学生には掲示及び全学教育ホームページにより発表します。各担当の先生方は学務情報システムより受講者名簿をダウンロード願います。

注： 2年生以上の学生が新入生と一緒に受講する場合があることを予め了承願います。
(支障がある場合は、事前にお知らせ願います。)

注： 後述4-②の関係で、クラス分け後に履修者の追加をお願いすることがあります。
その際は、可能な限り受け入れてくださるようお願いいたします。

2. 初回の授業について

一般の授業の開始日は平成29年4月7日（金）ですが、「基礎ゼミ」の授業のみクラス分け作業のため、4月17日（月）から始まります。

3. 開講までの流れ（案）

平成28年12月中旬	<u>基礎ゼミの手引（シラバス）原稿作成期限</u>
平成29年4月5日(水)午前	入学式
4月5日(水)午後～6日(木)	新入生オリエンテーション
4月6日(木)夜	事前に記入した基礎ゼミ受講希望届用紙の回収
	2年次（再履修等）受講希望届提出締切り
4月7日(金)～9日(日)	受講希望届（マークシート）読取り作業（TEC）
4月10日(月)午後～12日(水)午前	クラス分け抽選作業（データ処理）
4月12日(水)午後	全履修者の名簿作成作業
4月13日(木)	学生にクラス分け発表（掲示）
4月14日(金)	<u>受講者名簿ダウンロード（学務情報システム）</u>
4月17日(月)	<u>基礎ゼミ初回授業（月曜）</u>
4月20日(木)	<u>基礎ゼミ初回授業（木曜）</u>

4. 集中講義を行う場合について

① オリエンテーションの実施

「基礎ゼミ」を集中講義で実施される場合、集中講義の日程及び場所等を周知するため、オリエンテーションを実施していただく必要があります。

オリエンテーションの実施日時については、「基礎ゼミ」専用時間帯の

4月17日（月）3，4，5講時

4月20日（木）5講時

の中のいずれかの時間帯に必ず実施くださるようお願いいたします。

ただし、4月17日（月）5講時及び4月20日（木）5講時は、講義棟C棟が学生の課外活動で使用されるため、十分な教室数を確保できない状況にあります。

オリエンテーションの実施については、できる限り4月17日（月）3講時または4講時のいずれかで実施くださるようご協力をお願いします。

※ オリエンテーションの日時・場所については、基礎ゼミシラバスに記載してください。（シラバス作成については別途依頼します。）

② 実施日程決定時の注意事項

集中講義の日程を決定する際には、受講学生と十分に話し合って決めて下さい。

成績報告期限に間に合う日程での開講に、ご協力をお願いします。

通常の授業期間中には、他の授業と重複するため集中講義を実施できません。

夏季休業中に行われる科目（集中講義や専門科目の実習等）の履修者がいる場合、期間が重複する日程での開講は避けてください（学生は同時に履修できませんので、いずれかを履修できなくなります）。

どうしても調整がつかない場合は、基礎ゼミのクラス変更となります。そのため、集中講義で開講される場合は、必ず前述4－①の期間のいずれかに、初回オリエンテーションを行ってください（それ以後に日程重複が判明した場合、クラス変更は難しくなります）。

参考：授業期間

4月 7日（月）～8月 4日（金）

成績報告期限

8月31日（木）予定

教職科目の集中講義

9月12日（火）～28日（木）

専門科目の集中講義

初回オリエンテーションまでに日程表を送付します。

5. 最大受講者数の緩和について

クラス分け作業の結果、希望の重複により20名で区切れない状況が生じる可能性があります。その場合、実験などの受講制限が必要な科目を除き、受講者数を最大22～23名（20名の1割増し）程度まで認めてくださるようお願いします。

（支障がある場合は事前にお知らせ願います。）

6. 時間割の柔軟な対応について

「基礎ゼミ」の授業時間は、月曜日の3～5講時及び木曜日の5講時に割り当てられています。

このうち5講時の授業については、次のような問題があります。

- ・月曜日5講時に授業を行う場合

学生にとって3，4講時が空き時間になってしまう。

- ・木曜日5講時に川内北キャンパス以外で授業を行う場合

4講時まで川内北キャンパスで授業を受講している学生は、キャンパスの移動に時間がかかる。

このことから、受講学生が決定した後に、学生の実状に応じて、定時刻の授業実施にこだわらない等、柔軟な対応をお願いします。

7. 基礎ゼミの実施に係る経費について

資料4『全学教育科目「基礎ゼミ」実施に係る経費の取り扱いについて』を参照してください。

申請手続き等については、3月下旬に授業関係資料と一緒に送りますので、手続きの詳細についてはそちらをご参照願います。

なお、経費は事前に申請の上、審査を受けていただく必要があります。実際の申請は資料送付（3月下旬）後に行っていただくことになりますが、基礎ゼミの計画を立てる際に、実施場所・移動手段など疑問が生じた場合は、事前に全学教育実施係までお問い合わせ願います。

【基礎ゼミ実施経費申請の原則事項】

- ・ 1ヶ月前までに申請。（4月実施のものは除く）
- ・ 基礎ゼミ実施経費として申請可能なものは、主にフィールドワーク交通費のみ。
- ・ フィールドワークで博物館等を利用した場合、その入場料を支出する。
- ・ 宿泊費等は学生の負担となる（教員の宿泊費等は旅費規程により支出）。
- ・ 申請可能なフィールドワークは1授業に付き1回のみ。
- ・ 授業期間中に実施する場合には、他の授業が行われる平日を避けて計画すること。
- ・ JR等の利用は片道200km以内の普通乗車券のみ（特急券は不可）。
- ・ 借上げバスの利用はJR等の利用が不可能な場合で、片道100km以内かつ参加者数（教員含む）が15名以上の場合に可能。
- ・ 授業で使用する実験器具等の物品や、材料費等は支出できない。

【基礎ゼミ実施経費支出の注意事項】

経費支出は請求書払いを原則としますが、JRや路線バス等で請求書払いが困難な場合は立替払いとなります。実状は、「JR等→立替払い、借上げバス→請求書払い」となることがほとんどです。どういう場合であっても、学生に立替えさせることは禁止しています。立替払いの場合、教員の旅費は別途支給されますので、学生分のみ請求し、後日、領収書またはレシートを提出することとなります。クレジットカードで利用した場合、その時の利用明細が必要となります。領収書が発行できない場合や、発行できるかが不明な場合は、事前に全学教育実施係までお問い合わせ願います。

なお、経費削減のため、前売券等を購入可能な場合には、ご利用くださいますようお願いいたします。

8. TAについて

基礎ゼミを含む全学教育科目のTA配置基準等については、予算が不足していることから、現在、学務審議会教務委員会で再検討をしています。TA採用の具体的な手続きについては、12月頃にお知らせします。

9. 基礎ゼミシラバスの作成について

シラバスの原稿は、Webから入力していただくことになります。原稿作成の依頼は、

11 月下旬にメールで送付します。(複数の教員で授業を担当される場合は代表教員にのみ送付します。) 締切は 12 月中旬となります。なお、平成 28 年度のシラバスは、東北大学全学教育ホームページから閲覧することができますのでご参照願います。

【URL : http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku_annai.html】

10. 基礎ゼミ成果発表会

9 月下旬(9/29 予定)に、「基礎ゼミ」で学んだ成果を学生が発表する会を計画しております。

11. 学生による授業評価アンケートについて

授業評価アンケートの用紙を、5 月上旬に各担当教員に送付します(複数教員でご担当される場合は、代表者のみにお送りしますので、アンケート用紙を、授業評価を実施する教員へお渡しください)。

授業評価アンケートは、授業の最終日等、ご都合のよい日に実施してください。

「基礎ゼミ」問い合わせ先

【全般・クラス分け】

教育・学生支援部教務課 全学教育企画係

TEL : 7 9 5 - 7 5 7 8 FAX : 7 9 5 - 7 5 5 5

E-Mail : kyom-k@grp.tohoku.ac.jp 学内便 : 川 B - 7

【基礎ゼミ経費・教室等】

教育・学生支援部教務課 全学教育実施係

TEL : 7 9 5 - 7 5 5 8 FAX : 7 9 5 - 7 5 5 5

E-Mail : kyom-j@grp.tohoku.ac.jp 学内便 : 川 B - 7

授業担当の先生方へ

基礎ゼミについて

- (1)「基礎ゼミ」は大学教育への導入・イニシエーションを開設趣旨としており、1 クラス 20 人以下の文系理系の混合した新入生を対象にした授業です。課題は専門的なものではなく、学部横断的でかつ新入生が興味を持てるようなものを設定してください。
- (2)「基礎ゼミ」は、教員と学生及び学生相互間でフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションを作ることを1つの目標にしておりますので、担当の先生方の研究室でのゼミ、体験学習や実験、野外での調査や観察などをできるだけ取り入れることのできるような課題を設定していただければと思います。
- (3)一つの問題を種々の角度から横断的に考える態度を身につけさせることが「基礎ゼミ」の目標の一つとされています。その意味で一つの課題を複数の教員（2～3名）が担当することも可能です。
- (4)「基礎ゼミ」の単位は2単位です。授業の形態は、演習の他に、学生との話し合いによっては集中型、合宿型のものもあり得ると思われます。合宿の場合、一日6回分（12時間）相当と考え、1課題につき約2日半となります。学生が受講できるのは一人1課題です。

平成28年度
転換少人数科目・基礎ゼミ履修の手引き
(シラバス)
＜ 抜 粋 ＞

新入生のみなさんが、これから東北大学で履修することになる多くの授業のうち、まず初めに履修する「基礎ゼミ」は、他の授業科目と異なる特別な形態と意味を持っております。

みなさんの多くは、大学受験を意識して答えのはっきりしているものを正確に記憶し、高速で読み出すメモリ能力の訓練を中心とした勉強をしていたと思います。

これからの東北大学の学生としての生活は、未知のものへの挑戦を主としますので、まず、初めに高校との違いに気づいてほしいと思います。

この授業では、他の1, 2年生で受講する多くの授業のような、教員からの知識の伝達を主とするということはありません。学生が積極的に授業に参加することが求められます。教員からの一方通行の授業ではないのです。受講生は教員の出すテーマに従い、自分で工夫して調べ、教室で発表し、みんなで討論します。授業形態も様々で、実験、実習、見学を含む授業もたくさんあり、合宿で行うクラスもあります。すべての授業が終わったあとで、「基礎ゼミ」で学んだ成果を公開発表する会も計画されています。それは、研究とは何か？大学とは何か？大学で学ぶとはどういうことか？高校までの勉強とどこが違うのか？といった問題について教員と学生が共に考える場でもあるということです。

この授業は、東北大学の各学部所属の教員ばかりではなく、総合大学である本学の特色を生かして、全ての研究所、センター、大学病院の教員が分担し、名誉教授にも担当していただきますので、授業で扱われるテーマは、専門的なものではなく、一般的な、入門的な、また学部横断的なものになっています。従って、**理系・文系はもちろん、入学した学部にもこだわらずに179の授業テーマ、形態などの中から、興味のあるふさわしいクラスを選んでください。**いずれか一つのクラスに所属することになります。

「基礎ゼミ」のクラスで、教員やいろいろな学部の学生と真剣に学び、また、楽しいコミュニケーションを図ってください。そして、積極的に学ぶ姿勢を培ってくださることを期待します。

「展開ゼミ」実施に当たっての留意事項

1. 開講の経緯

「学びの転換」を掲げる全学教育科目「基礎ゼミ」は、初年次学生に「大学での学び」を体験させ、学生の主体的な学習態度を育む授業科目として平成 14 年度の導入以来、大きな教育的成果を上げてきました。

毎年実施される「学生による授業評価」アンケートでの満足度等の評価はきわめて高く、2 年次学生との「学生との懇談会」では、1 年次後期にも基礎ゼミを開講し、受講の機会を増やしてほしいとの要望が継続的に出されてきました。他方、基礎ゼミ担当教員対象のアンケートにおいても、学生の積極的な学習態度や主体性を向上させるために「基礎ゼミ」に続く展開的、学際的なゼミを開講することを望む意見・要望が出されていました。

これらを踏まえ、1 セメスターに開講してきた全学教育科目「基礎ゼミ」に加えて、平成 25 年度から新たに「展開ゼミ」を開講しています。

2. 展開ゼミについて

「展開ゼミ」は、入学後半年間の「大学での学び」の経験をもとに、「基礎ゼミ」で育まれた主体的な学習姿勢をさらに高めようとするものであり、演習・実習・実験・フィールドワーク等のアクティブ・ラーニングを取り入れた 20 名程度の少人数教育の授業形態を言います。いわゆる教育手法（スタイル）のことを指しており、教育内容については授業担当者が決定することとしています。様々な科目類・科目群に渡って広く開講しています。

3. 受講者の決定、初回の授業について

他の全学教育科目と同様に、履修登録期間後に受講者が決定します。また、初回の授業も「平成 29 年度全学教育科目実施学年暦」に従って開始します。

4. 受講学生の上限について

目安は 20 名程度としていますが、授業内容に応じて授業担当教員が上限を決定し、

履修学生の決定についても担当教員の判断で行ってください。

5. TA について

展開ゼミを含む全学教育科目の TA 配置基準等については、予算が不足していることから、現在、学務審議会教務委員会で再検討をしています。TA 採用の具体的な手続きについては、前期の開講であれば 1 2 月頃、後期の開講であれば来年 7 月頃にお知らせします。

6. 展開ゼミシラバスの作成について

シラバスの原稿は、Web から入力していただくことになります。原稿作成の依頼は、1 月上旬にメールで送付します。(複数の教員で授業を担当される場合は代表教員にのみ送付します。) 締切は 1 月下旬となります。なお、平成 28 年度のシラバスは、東北大学全学教育ホームページから閲覧することができますのでご参照願います。

【URL : http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku_annai.html】

7. 学生による授業評価アンケートについて

「学生による授業評価」は、授業の最終日等を実施してください。後日、文書又は E-Mail で、実施日時等を照会します。

8. その他

「展開ゼミ」はカレントトピックス科目群の枠組みに限定されず、教育内容によって、基幹科目類や人文科学、社会科学群としても開講することができます。また、2 セメスターに限定されず、3 セメスター以降の開講も可能です。(国際共修ゼミを「展開ゼミ」として開講する場合には、1 セメスターに開講することもできます。)

「展開ゼミ」問い合わせ先

教育・学生支援部教務課 全学教育企画係

TEL : 7 9 5 - 7 5 7 8 FAX : 7 9 5 - 7 5 5 5

E-Mail : kyom-k@grp.tohoku.ac.jp 学内便 : 川 B - 7

全学教育科目「基礎ゼミ」実施に係る経費の取り扱いについて

平成 17 年 12 月 26 日 学務審議会

平成 19 年 2 月 5 日 学務審議会一部改正

平成 24 年 12 月 3 日 学務審議会一部改正

平成 26 年 7 月 7 日 学務審議会一部改正

全学教育科目「基礎ゼミ」実施経費として、教育基盤経費の予算の範囲において、以下のとおり取扱うものとする。

1 フィールドワークに要する費用等

- (1) 受講学生が JR 線等を使用して移動する必要がある場合は、審査の上、1 授業につき 1 往復の普通乗車券購入費を支出する。この支出の条件は、原則として移動距離は片道 200Km までの、受講者が全員参加する場合とし、目的地まで複数の路線がある場合は最も経済的な経路とする。

なお、JR 線等の普通乗車券の料金と同程度の料金である場合には、定期運行の路線バスとすることができる。

- (2) 受講学生がマイクロバス等を使用して移動する必要がある場合は、1 授業につき 1 往復のマイクロバス等借上費用(運転手付)を支出する。この支出の条件は、原則として移動距離が片道 100Km までの JR 線等の利用が不可能な場合であり、かつ、引率教員を含めた参加者数が 15 名以上であることとする。
- (3) 上記(1)及び(2)以外の特急料金等(急行、座席指定、グリーン料金等)、施設使用経費、宿泊費等の費用は、受講学生の負担とする。
- (4) フィールドワークで博物館等を利用した場合、その入場料を支出する。
- (5) 引率教員は、教育基盤経費により、本学旅費規程に基づく出張の手続を行うものとする。
- (6) フィールドワーク等に参加する学生は、日本国際教育支援協会の学生教育研究災害傷害保険に加入していなければならない。
- (7) ティーチング・アシスタントがフィールドワークに参加する場合は、受講学生の取り扱いに準ずる。
- (8) 上記(1)または(2)の距離を超えて実施する必要がある場合は、あらかじめその理由を教務課へ提出するものとし、基礎ゼミ委員会において協議のうえ、その可否を決定する。

2 申請手続等

- (1) 交通費を申請する教員は、授業開始前に、フィールドワーク等を実施する理由・目的地・実施期日・参加予定人数を記載した申請書に、詳細日程予定表及び参加者名簿を添えて提出する。また、交通費の配分を受けた教員は、フィールドワーク等の実施後に報告書(A4 判 1 枚程度)を提出する。
- (2) 申請書及び報告書は、基礎ゼミ委員会委員長が受理する。なお、事務処理は、教務課が担当する。

2. 講 演

「配慮を要する学生の理解と対応」

学生相談・特別支援センター准教授 中島 正雄

平成28年度基礎ゼミ・展開ゼミFD

配慮を要する学生の理解と対応

高度教養教育・学生支援機構
臨床教育開発室
中島正雄

1

本日の内容

- I 学生相談内容の近年の傾向
- II 障害をもって入学してくる学生
- III 学生対応で留意したいこと
- IV 基礎ゼミ・展開ゼミの意義

2

I 学生相談内容の近年の傾向

- 1 学生の**多様化**。学生相談の内容も多様化、重度化、複雑化。
- 2 **対人関係の相談**の増加
- 3 **発達障害**やその傾向の強い学生の相談の増加

3

I-1 多様な新入学生たち

- さまざまな個性やタイプ、経歴、民族・宗教的背景の学生
 - － いじめられ経験、長期の不登校体験
- 発達障害等の障害を持つ学生
 - － 発達障害、精神疾患、聴覚障害、難病等
- 3.11の震災の影響を受けている学生など

多様な学生が入学してきます

4

I-2 近年増加している相談

- 対人関係の相談
- なかでも、**学生間での関係のこじれ・トラブル**（暴言・威嚇・脅しのメール⇒ストーカー的行為、刑事事件に発展するものも）
- 思春期・青年期（友人作りの練習期）における「友を選ぶこと」の重要性
- ✓ 「身近な関係」での**SNS**や**ライン**。トラブルの発生を助長

5

I-3 近年増加している相談

- **発達障害**学生の相談
- 学業・研究、対人関係、進路の躓きを契機に
- 発達障害学生本人から、また**その関係者**（家族、教職員、サークルや研究室の同級生・先輩・後輩、恋人）**からの相談**、援助活動が近年急増

6

Ⅱ 障害をもって入学してくる学生

- 学生相談・特別支援センターでは毎年、「合格手続き書類」中に、「障害をお持ちの学生ならびに保護者の方へ」と題する、「入学直後からの支援希望」を尋ねる書類を同封
- 身体障害、感覚障害、発達障害その他の障害をもつ新生児から、それぞれ数名ずつの支援希望が寄せられてくる
 - － アスペルガー症候群等 数名
 - － 過敏性腸症候群等の難病 数名
 - － 難聴、弱視など 数名
- 支援：ゼミの委員会やその他の委員会に連絡をとり、担当教員の方と協議、支援にあたることありうる

7

Ⅱ 障害を持つ学生への配慮

- 「障害者差別解消法」成立⇒「合理的配慮の提供」の義務化(国公立大)(私立大学も努力義務)
- ✓聴覚障害、視覚障害の学生
- ✓肢体不自由、難病の学生
- ✓発達障害、精神障害の学生

8

基礎ゼミ・展開ゼミ担当者として

- 既診断学生への「合理的配慮」の流れ～1, 2年次学生の場合
- 学生からの「配慮申請」に対して、学生の所属学部が特別支援室や全学教育教務の協力を得ながら合理的配慮の提供を検討し、実施。
- 実施にあたり、所属学部から担当教員への配慮依頼がなされる。その際、担当教員と協議をもつことがある。

9

Ⅱ 配慮、支援の例

- 1, 2年次全学教育における配慮、支援
- 聴覚障害の学生
 - 継続的に学生相談・特別支援センターでフォロー
 - 座席の配慮, ノートテイクの支援
 - 教室でのマイク使用。補聴支援機器の導入
- 視覚障害の学生
 - 拡大資料の作成・提供

10

Ⅱ 配慮、支援の例

- 1, 2年次全学教育における配慮、支援
- 発達障害(自閉症スペクトラム障害)の学生
 - ✓継続的に所属部局, 全学教育, 学生相談・特別支援センターでフォロー
 - ✓履修計画支援
 - ✓SLA等による学習支援(数学系科目、物理学の学習。情報基礎、自然科学総合実験レポート作成の手ほどき)
- 代替措置の検討と実施
 - ✓レポート提出締め切り日の延長措置がとられることも。
 - ✓(必要が生じたとき)別室受験
- 安心感⇒代替措置が不要になることもしばしば

11

主な発達障害

- 自閉症スペクトラム障害(ASD)
 - － 社会性やコミュニケーション能力といった社会生活全般に関わる基本的機能において難しさを抱える
- 注意欠陥多動性障害(ADHD)
 - － 落ち着きがなく注意の持続や衝動コントロールに難しさを抱える
- 学習障害(LD)
 - － 「読み」「書き」「計算」など特定の領域で極端な困難を抱える 全般的知的発達に遅れはない

12

東北大学で出会う発達障害をもつ学生

- 自閉症スペクトラム障害と注意欠陥多動性障害
- 多数を占めるのは、自閉症スペクトラム障害のなかでもほとんどが**アスペルガー症候群**
- 学習障害の学生

* 留学生のなかにも発達障害の学生が時折見受けられます。

13

発達障害の併存症

- 気分障害(うつ状態)
- 不安性障害(パニック障害)
- 適応障害(不登校)
- 摂食障害(拒食症、過食症)
- 妄想性障害(精神病症状)
- 解離障害(多重人格)

(出典) 広島大学岡本百合准教授の講演資料から

- 衝動的行動、対人トラブルなどの行動化
- 不登校、ひきこもり
- ハラスメントやストーカークの加害、被害も

14

発達障害は、感覚障害、運動障害と異なり
「適応上の躓きが生じてはじめて
障害が問題となる」障害

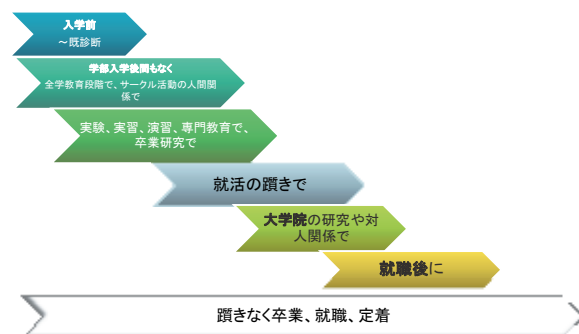
診断・告知の契機は躓き

躓きが生じなければ「個性・傾向」、「障害」として診断されるには至らない



15

発達障害をもつ学生の躓きの契機



16

アスペルガー症候群の学生の特徴と対応

- 言葉によるコミュニケーションは、一見よくとれているが、それに伴う**感情や状況の読み取り**は苦手
- **言葉をその通りに受け止めてしまう**
例) わからないところを飛ばして次にはいってはいけません
この実験は時間をかけて確かめながらやりなさい
困ったらすぐに連絡しなさい

岡本准教授配布資料から

◆ **対応: 具体的で、明確、場合分けをした指示や説明をするようにする**

17

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 基礎ゼミ・展開ゼミ運営者として留意したいこと
- 人間関係のトラブルの防止、対応
→ 迷惑行為、ストーカーク行為→事件化することも
- 気になる学生への対応
→ 発達障害の学生
→ 精神科的症状を呈する学生
- 事故、ハラスメントの防止、対応
→ 事故
→ ハラスメント

18

基礎ゼミ・展開ゼミを担当するにあたって

- 教育者として授業内容の充実
- クラスの運営者としてリスクマネジメント

- 「(クラスの)運営者」としての教員
 - 留意すべきことは
 - ・受講学生間でのトラブルの徴候に気付いたら放置せず対応を考えたい
 - ・「つきまとい行為」の例は、稀ではない
 - ・みずから個人情報の管理を行い、学生にも教育したい
- ✓「住所」「実家住所・電話番号」は「共有し合わない、開示しない」

19

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 人間関係のトラブル
 - ・学生間でトラブルが発生する例も
 - ・模擬事例①「基礎ゼミで、グループを組んだ男子学生が夜中に頻回のメール、携帯電話、脅す内容に。怖くて授業に出られないばかりか、キャンパスに足を踏み入れられなくなり、試験が近づいてきた。他の科目も出席できなくなり、心療内科へいく事態に。医師に学生相談を勧められ来談」

20

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 人間関係のトラブル
 - ・学生間でトラブルが発生する例も
 - ・模擬事例②「基礎ゼミのグループの発表の準備を学生のアパートで行うことに。一人が休み、男子学生Aと二人きりになったが、そこで乱暴され.....」
 - ・場は、「合宿の場で」なども起こりうる

21

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 人間関係のトラブル
 - ・学生間でトラブルが発生する例も
 - ・模擬事例①②の問題点：学生間の個人情報共有を教員が行った。それによって①迷惑行為が発生することとなった。②暴行事件が発生することとなった。異変に気づきつつも初期対応に遅れが生じ、心身の症状をきたし、全学教育の他の履修科目にも影響が及ぶこととなった。

22

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 人間関係のトラブル
 - ・対応：学生相談所カウンセラーを交え、担当教員ならびに学務審議会委員とで対応を協議、(他の全学教育科目に関して)→学務審議会委員長→外国語等の他の委員会とも協議
 - ・防止：
 - － 不要な個人情報(住所×、携帯番号×、メールアドレス△)の共有をさせないようにする
 - － グループ学習の人数(二人きり×)、場所(アパート×、学内や公共的空間○)について注意喚起しておく

23

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- セクシャル・マイノリティ(LGBT)の学生
 - ・呼称について男女区別せず。統一呼称「さん」付けにするなど。
 - ・合宿の場でのトイレや洗面入浴等の配慮。

24

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 気になる学生
 - 言葉を字義通りに受け取る、明らかに場面にそぐわない、こだわりや執拗さを伴った言動を示す等、発達障害であるかもしれない学生
 - 自傷行為、緘黙など、気になる行動を示す学生
- 対応：
 - ◆ 学生相談・特別支援センターとの連携（相談、協議）による支援
 - － どう見守るか
 - － どう学生相談・特別支援センターや保健管理センターへつなぐか
 - － 学部との連携はどうするか

25

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 事故の対応と防止
 - 事故
 - － フィールドワークや施設等見学に際し、原付で移動中に事故発生
- 対応：学務審議会への連絡その他
- 防止：公的交通機関の利用を指示する

26

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- ハラスメントの対応と防止
 - 学生との一定の距離感必要
 - ハラスメント
 - － 合宿におけるセクハラ
 - － 学生間のセクハラ行為や飲酒の強要を見逃す
 - － 学生に私的な付き合い、あるいは
 - － セメスター終了後も、SNSなどでのやりとり（私的交流）を教員が続けようとする。
- 対応：学生相談所やハラスメント相談窓口の活用。全学教育の各委員会や、全学教育教務、学部の学生相談・特別支援連絡会議委員との連携、協議が必要な事態も
- 防止：運営者としての役割行動をとる。授業担当者としての関係と私的関係を峻別する。

27

Ⅲ 学生対応で留意したいこと

- 震災から小さからぬ影響を受けている学生
 - PTSDハイリスク群の在校生
 - － 平成24年度 463名 (6.0%)
 - － 平成25年度 494名 (4.9%)
 - － 平成26年度 415名 (4.1%)
 - － 平成27年度 346名 (3.5%)
- 入学後の学生生活において、適応の苦しみが生じうる
- 対応：個別に連絡を取り、学生相談所利用を呼びかける働きかけを実施

28

Ⅳ 基礎ゼミ・展開ゼミの意義

- 東北大学での「教養教育」「専門教育」「正課外教育」のスタート地点にある学生に基礎ゼミ・展開ゼミはどのような影響を与え、どのような意義を有しているのだろうか
- 「学問・研究の旅」に、また学生支援の立場からは「自分づくりの旅」にいざなう意義を持つものではないだろうか
- 基礎ゼミ・展開ゼミが、大学という場での相互尊重の関わりを体験する第一歩となることを期待したい（ネットにはヘイトスピーチがあふれ、学生はそれに晒されているが）

29

必要なときにはどうぞ遠慮なく

- 学生相談・特別支援センターへ
 - 学生相談所 電話：795-7833
gakuso@ihe.tohoku.ac.jp
 - 特別支援室 電話：795-7696
t-sien@ihe.tohoku.ac.jp
- ハラスメント全学学生相談窓口へ
 - 電話：795-7812
 - 電子メール：gakuso@ihe.tohoku.ac.jp

30

3. 基礎ゼミ実践事例の報告

① 「人体の構造と機能」～実験・実習型ゼミ実践事例

医学部・医学系研究科講師 尾形 雅君

② 「Interactive Short Course in Marine Biology」
～フィールドワーク型ゼミ実践事例

高度教養教育・学生支援機構准教授 Martin ROBERT

③ 「ロシア研究入門」～演習型ゼミ実践事例

東北アジア研究センター助教 塩谷 昌史

ゼミ実践事例の報告

「人体の構造と機能」 実験・実習型ゼミ実践事例

医学部・医学系研究科 器官解剖学分野
尾形 雅君

【実施授業の全体の流れ】

「人体の構造と機能」

【講義】

第1回：総論

第2回：心臓

第3回：脈管系（血管系）
（リンパ系）

第4回：内蔵系（口腔、胃）
（小腸、大腸）

第5回：内蔵系（肝臓、脾臓）

第6回：内蔵系（呼吸器）

第7回：内蔵系（泌尿器）

第8回：内蔵系（生殖器）

【実習】

第9回：実験動物で臓器の観察と摘出・固定
2コマ分（マウスの解剖実習）

第10回：各種臓器の組織標本作製
2コマ分（臓器の包埋および組織切片作製）

第11回：各種臓器の組織標本作製
2コマ分（組織切片の染色）

第12回：組織切片の光学顕微鏡観察
（デジタル画像撮影および解説）
電子顕微鏡でミクロの世界を観察

講義と実習の融合形式

【受講生の数および所属学部】

《工学部：3名》	B6TB10@@ B6TB10@@ B6TB40@@
《医学部・医学科：2名》	B6MB10@@ B6MB10@@
《医学部・保健学科：2名》	B6MB30@@ B6MB30@@
《歯学部：1名》	B6DB10@@

実技体験（組織標本作製等）に用いる機器などの制限から、
8名の受講者数に設定

【シラバスの概要】

《授業の目的と概要》

解剖学総論では、人体を構成する幾つかのシステムを紹介し、
人体がどのような様に構築されているかを概説する。
各論では、心脈管系、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、生殖器系、
神経系に分けて、正常な器官の構造と機能の理解を目標に講義を行う。
マウスの解剖実習では、各種器官の位置・形態を観察し、目的とする臓器を摘出し、組織標本(永久標本)を作製する。

《学習の到達目標》

人体を構成する各器官の位置、形態および構造をできるだけ画像を用いて解説し、個々の機能的現象を理解できるようにする。
自らが作製した組織標本の顕微鏡観察を通して、臓器の構造を学び、生体の機能について学習する。

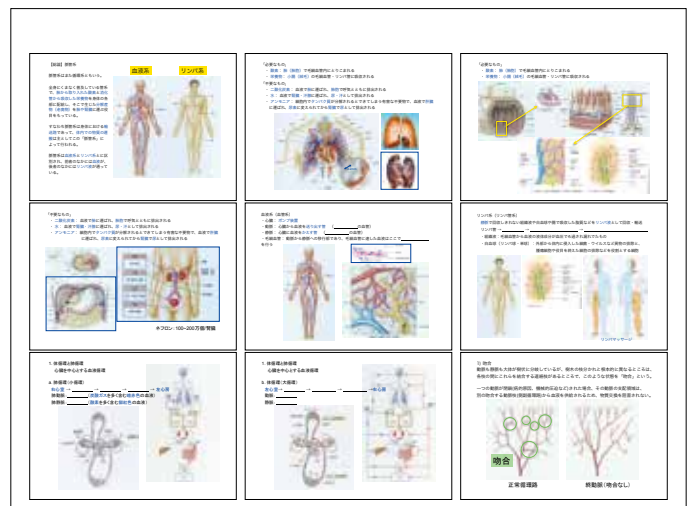
【学生の主体性を育むために工夫した点】

初回の講義において、全15回の講義・実習の流れを説明

身近な体験を例に、各種臓器の機能について興味を持たせる
・（軽い）怪我で流れる血は、動脈血？静脈血？ → 脈管系
・ 飲み薬の行方は？なぜ効果に時間がかかる？ → 消化器系
・ 排尿は一日何回？一回にどの位の排出量？ → 泌尿器系
・ 酸素を取込んで二酸化炭素を出す呼吸とは？ → 呼吸器系
・ 精子・卵子はいつ作られるのか？ → 生殖器系

各論の講義で各種臓器の働きを理解することで、
→ 後半では、各自が興味を持った臓器を、
→ 自らがマウスを解剖して臓器を取り出し、
→ 組織標本作製して顕微鏡観察および撮影を行う。
→ その組織画像を使って、その臓器の機能の解説を受ける。

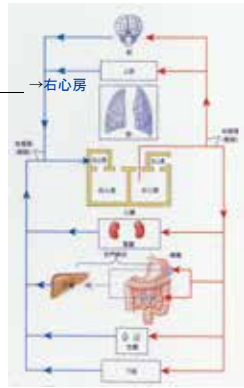
講義ごとにレジュメ（スライドの要約）を用意した
→ 要所の穴埋め方式を採用
（→ 学生の学習意欲の亢進により途中変更）



1. 体循環と肺循環
心臓を中心とする血液循環

b. 体循環(大循環)

左心室 → _____ → _____ → _____ → 右心房
動脈: _____
静脈: _____



【学生の主体性を育むために工夫した点】

ミニットペーパーの活用

・講義終了時に配布し、次回の講義開始前に提出

- 1) 当日の講義について(簡単な課題を与える、後半は自由課題)
 - 2) 後半の解剖実習で採取し、組織標本作製を予定している臓器
 - 3) 授業への要望・感想など
 - 授業開始時に一通り目を通し、
 - 質問に対する回答はその場で対応する。
- (場合によっては宿題として持ち帰り、次回の講義の開始時にスライドで解説する)

講義の開始時(10分程度:板書)

- ・前回の講義の簡単な復習を行い、
 - ・その日に講義する臓器の機能についてサマリーする。
- 解剖学学習に対するスイッチが入るように心掛けた。

《人体の構造と機能》

《マクロからミクロへ：ミクロの世界の観察で、生命の神秘性を実感》

【講義】

第1回：総論

第2回：心臓

第3回：脈管系(血管系)
(リンパ系)

第4回：内蔵系(口腔、胃)
(小腸、大腸)

第5回：内蔵系(肝臓、脾臓)

第6回：内蔵系(呼吸器)

第7回：内蔵系(泌尿器)

第8回：内蔵系(生殖器)

【実習】

第9回：実験動物で臓器の観察と摘出・固定
(マウスの解剖実習)

第10回：各種臓器の組織標本作製
(臓器の包埋および組織切片作製)

第11回：各種臓器の組織標本作製
(組織切片の染色)

第12回：組織切片の光学顕微鏡観察
(デジタル画像撮影および解説)
電子顕微鏡でミクロの世界を観察

心臓から出る血液量(心拍出量)



1回の拍動当たりの排出量
60~90ml/回
100ml/回
1分当たりの拍動数
60~100回/分
60回/分



40本分

40杯分

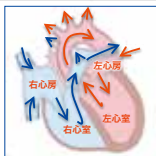
60分 24時間
6L/1分 → 360L/時間 → 8000L/日

脳	→ 15% → 1200L	
心臓	→ 5% → 400L	浴槽2杯分/日
内臓	→ 25% → 2000L	
(腎臓)	→ 20% → 1600L	
筋肉	→ 20% → 1600L	
皮膚・骨	→ 15% → 1200L	

【心臓】

1. 心臓の位置と形態
2. 心臓の構造
3. 心臓の弁
4. 心臓壁の構造
5. 刺激伝導系
6. 心臓の血管

・心臓自身を栄養する冠状動脈について
左右の冠状動脈：心臓の壁(心筋)を養う動脈
上行大動脈の起始部からはじまる



ヒトでは1日当たり400Lの血液が必要とされる
400L=浴槽2杯分

《人体の構造と機能》

《マクロからミクロへ：ミクロの世界の観察で、生命の神秘性を実感》

【講義】

第1回：総論

第2回：心臓

第3回：脈管系
(血管系)
(リンパ系)

第4回：内蔵系(口腔、胃)
(小腸、大腸)

第5回：内蔵系(肝臓、脾臓)

第6回：内蔵系(呼吸器)

第7回：内蔵系(泌尿器)

第8回：内蔵系(生殖器)

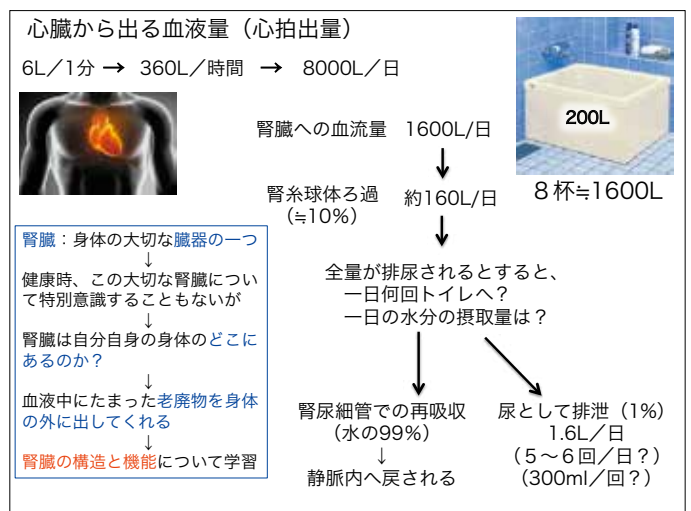
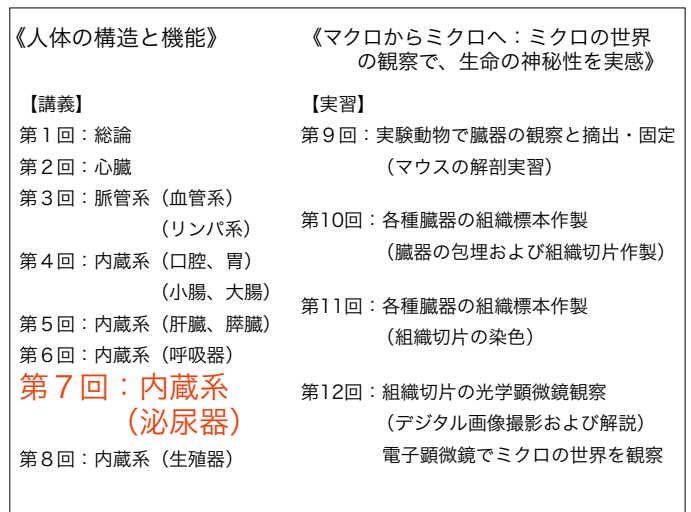
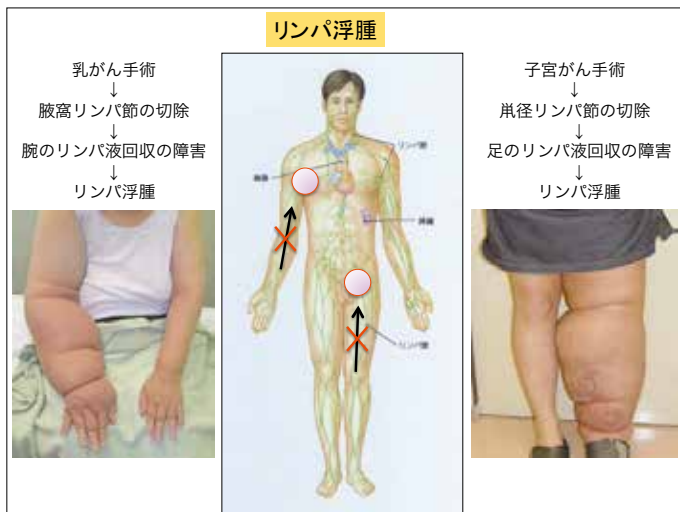
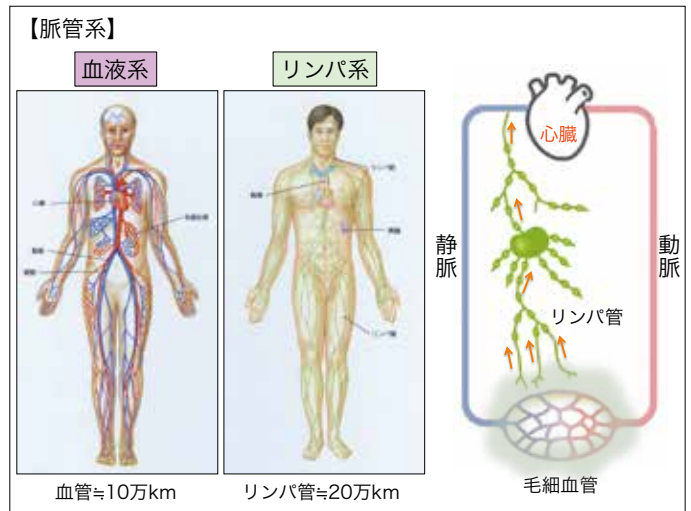
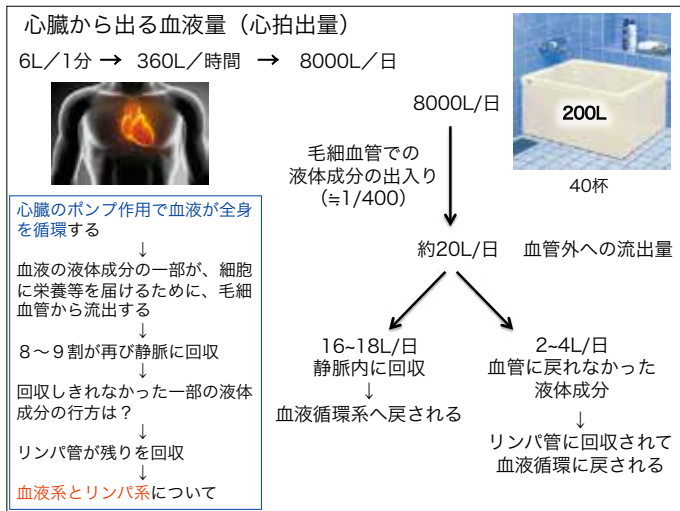
【実習】

第9回：実験動物で臓器の観察と摘出・固定
(マウスの解剖実習)

第10回：各種臓器の組織標本作製
(臓器の包埋および組織切片作製)

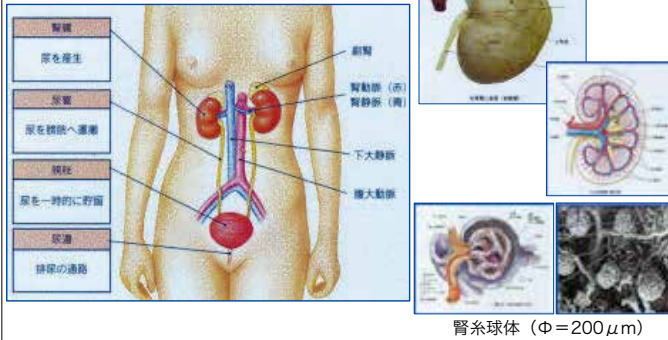
第11回：各種臓器の組織標本作製
(組織切片の染色)

第12回：組織切片の光学顕微鏡観察
(デジタル画像撮影および解説)
電子顕微鏡でミクロの世界を観察

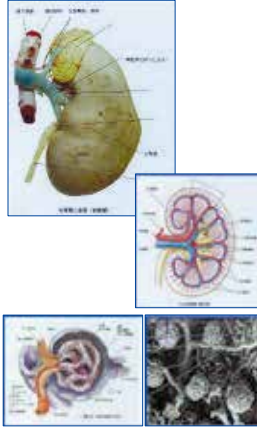


泌尿器系

血液中の老廃物等を尿として排泄する器官
尿を産生する：**腎臓**
尿を運搬する通路：**尿管、膀胱、尿道**



腎臓



腎糸球体 (Φ=200μm)

《人体の構造と機能》

《マクロからミクロへ：ミクロの世界の観察で、生命の神秘性を実感》

【講義】

- 第1回：総論
- 第2回：心臓
- 第3回：脈管系（血管系）
（リンパ系）
- 第4回：内蔵系（口腔、胃）
（小腸、大腸）
- 第5回：内蔵系（肝臓、脾臓）
- 第6回：内蔵系（呼吸器）
- 第7回：内蔵系（泌尿器）
- 第8回：内蔵系（生殖器）

【実習】

- 第9回：実験動物で臓器の観察と摘出・固定
（マウスの解剖実習）
- 第10回：各種臓器の組織標本作製
（臓器の包埋および組織切片作製）
- 第11回：各種臓器の組織標本作製
（組織切片の染色）
- 第12回：組織切片の光学顕微鏡観察
（デジタル画像撮影および解説）
電子顕微鏡でミクロの世界を観察

【ミクロの世界の観察で、生命の神秘性を実感】

人体を構成する細胞・組織・器官が身体の中のどの部位にあるのか？

講義および自主学習した諸器官について、マウスの解剖実習を通して、その器官の形態構造と機能を一体として把握できることを目標とした。

動物のからだは、機能的な単位である細胞が集まって組織を構成し、その組織が集まって臓器を形成し、各臓器が集まって個体を構成している。

- 本基礎ゼミでの解剖実習では、これを逆にたどり、
- 個体の解剖によって臓器の観察を行い、
 - 採取した臓器を使って組織標本作製し、
 - 組織の観察を通して、
 - 個体の成り立ちについて理解できることを目標とした。

実験動物：無菌環境下で繁殖飼育されたリタイアマウスを使用。
マウスの解剖に際しては麻酔を使い、痛みを起していないことを確認後に開腹作業を行う。

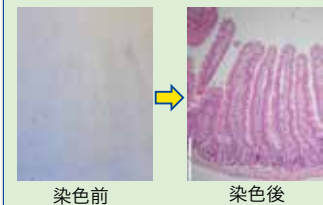
1. 解剖
マウスに致死量の麻酔を投与後、
→ 開腹して各種臓器の配置を観察し、
→ 臓器を採取してホルマリン固定



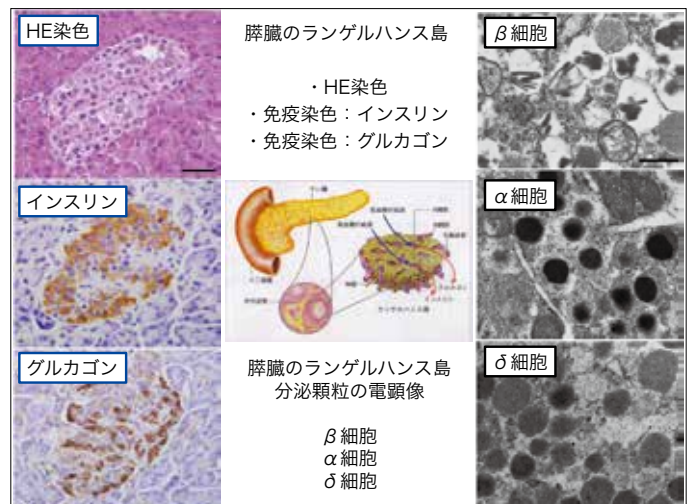
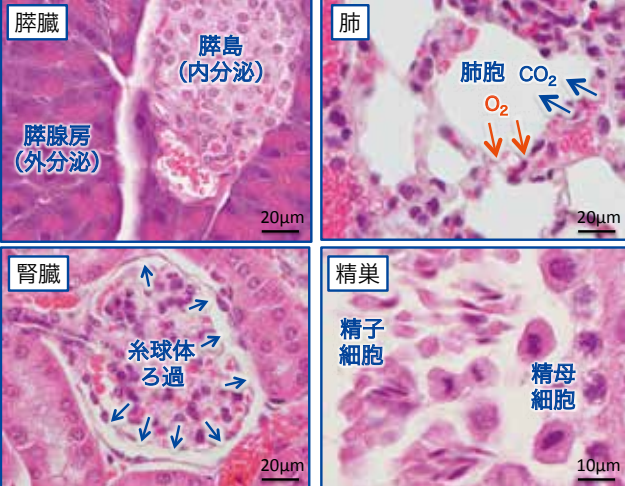
2. 組織切片作製と染色
臓器をパラフィン包埋後
→ ミクロトームで厚さ5μmの
組織スライス作製
→ 各種染色を施す



ヘマトキシリン・エオジン（HE）染色



顕微鏡観察による組織学実習



【基礎ゼミを終えての感想１】

教員側からの話しかけを交えた講義をすることで、学生側から質問しやすい雰囲気生まれ、また些細な疑問に対してもその場でフィードバックすることで、学生との心理的距離が近くなることを実感した。

ミニットペーパーでの些細な疑問・質問・意見に真摯に対応することで、学生の積極性が引き出されていくことを実感した。

興味が芽生えた後の学生の自主学習への意欲的な取り組みに、教員として大いに刺激を受けた。
(解剖実習に向けた学習意欲の上昇)

限られた時間（15コマ）に対し、学習内容を詰め込みすぎた感が否めず、今後は各論で取り上げる臓器の選定の再考が必要かも？
→只、各学生の興味を持った臓器が多種にわたっている。
(講義した全ての臓器の試料作製を希望する学生も多かった)
→次回からの対策を思案中

【基礎ゼミを終えての感想２】

最初は解剖実習に不安を感じていた学生もいたようだが、講義の進行に伴い、臓器の構造と機能に興味を持ち出し、実際の解剖実習では臓器の摘出に始まり、組織標本の作製において積極性の高まりが感じられた。また組織画像を用いての機能解説時の学習意欲は目を見張るものであった。

3回目の講義の終了時に、学生から「レジュメの穴抜きを減らしてほしい」「レジュメの穴抜きをやめて、その分を解説時間に当ててほしい」との要望を受ける。→レジュメの変更

本基礎ゼミでは、マクロとミクロの学習をすることで、二次元の情報から三次元的な立体構築としての理解まで実感してもらえた。

解剖実習において、大学院生(D4:宮崎君)のサポートにより円滑に実習を遂行することが出来ました。



シラバス

▶ 授業の目的と概要

- 青森県青森市浅虫にある浅虫海洋生物学教育研究センターにて5日間の集中講義として開催する。海の生き物を用いて、受講生自らが考えて実験の計画、結果の解釈、仮説の構築・検証をし、与えられた目的に向かって自由かつ能動的に実験に取り組む。その結果を受講生の前で口頭発表する。素晴らしい自然環境に触れ、生物に対する広い生命観を育む。以上のことを留学生を対象とした同様のコースと共催し、留学生と日本人学生混合の小グループのなかで行うことで、上記の問題発見・解決力だけでなく、国際コミュニケーション力を同時に学ぶことを目的とする。使用言語は英語とする。

▶ 学習の到達目標

- わからないことを明らかにするプロセスを自分の考えに基づいて試行錯誤し、自分なりの答えを見つけることができる。また、自分の考えや経験を他人にわかりやすく伝えることができる。英語である程度の意思疎通ができる。

▶ 授業内容・方法と 進度予定

- 本ゼミで扱う海の生き物の簡単な説明を受けた後、これら生き物の発生学的または生理学的性質を明らかにするため、留学生・日本人学生混合のいくつかのグループに分かれ、グループ内で議論しながら受講生自らが考えて実験の計画、結果の解釈、仮説の構築・検証をし、自由かつ能動的に実験に取り組む。最終日には、本ゼミでやったこと、考えたことを英語で口頭発表する。

▶ 成績評価方法

- 口頭発表の内容50%、レポート50%

▶ 関連URL

- 授業時間外学習
- 本ゼミ期間中に全てが完了予定のため学習準備・ゼミ後の学習等はない。

▶ その他

- 文系の学生の積極的な参加を歓迎する。
- 理学部生物学科の学生は学科1年時の「海洋生物学および実習I」で同様の内容を行う(留学生との混在なし)。
- 開催場所は青森県青森市の浅虫海洋生物学教育研究センターで行う。
- 開催期間は8月28日(日)から9月1日(木)の間の4泊5日。
- 4月上旬に行われるオリエンテーションで持ち物等詳細をお知らせするので、受講者は必ず出席のこと。

Program origin

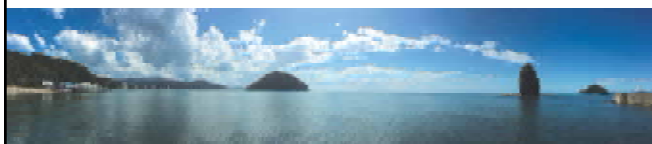
A matchmaking story

- ▶ Prof. Kumano wanted more international student activities at Asamushi center
- ▶ M. Robert wanted a different student experience off-Sendai campuses, ideally in natural environment
- ▶ Prof. Haga suggested we meet and talk
 - And then...

Why Asamushi?

The venue

浅虫海洋生物学教育研究センターとは？

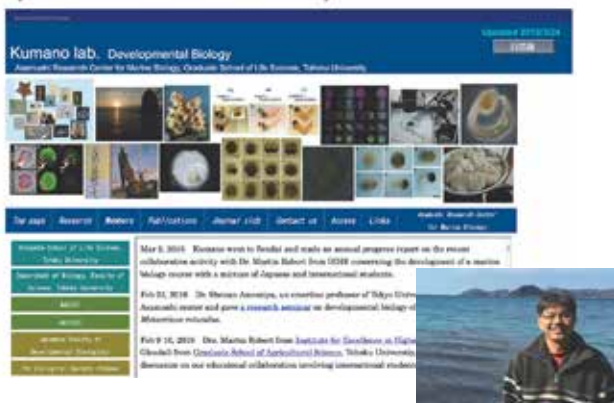


現場 — 浅虫温泉



<http://www.biology.tohoku.ac.jp/lab-www/asamushi/>

Collaboration with Prof. Kumano (Director of ARCMB)



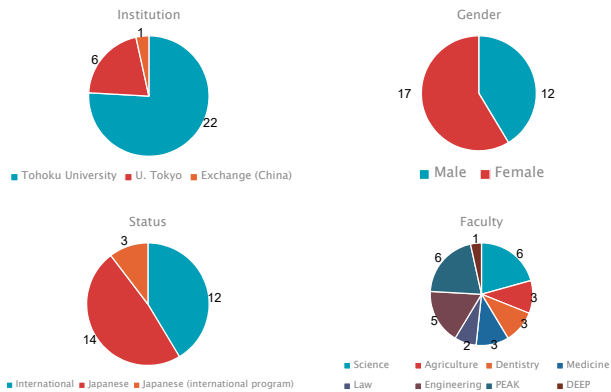
A collaborative project The 4i program: Interdisciplinary, inter-faculty, inter-university, international)

Name (Last, First)	Affiliation
Robert, Martin	Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University
Kumano, Gaku	Asamushi Research Center for Marine Biology
Gleadall, Ian	Faculty of Agriculture, Tohoku University
Nakamoto, Ayaki	Asamushi Research Center for Marine Biology
Matsuda, Yasuyuki	Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo

Participants profile

	Affiliation	Category	Year
1	Faculty of Science, Tohoku University	Undergraduate student	B1
2	Faculty of Science, Tohoku University	Undergraduate student	B1
3	Faculty of Science, Tohoku University	Undergraduate student	B1
4	Faculty of Dentistry, Tohoku University	Undergraduate student	B1
5	Faculty of Engineering, Tohoku University	Undergraduate student	B1
6	Faculty of Engineering, Tohoku University	Undergraduate student	B1
7	Faculty of Agriculture, Tohoku University	Undergraduate student	B1
8	Faculty of Agriculture, Tohoku University	Undergraduate student	B1
9	Faculty of Engineering, Tohoku University	Undergraduate student	B2
10	DEEP program, University of Tokyo	Graduate student	B3
11	PEAK program, University of Tokyo	Undergraduate student	B1
12	PEAK program, University of Tokyo	Undergraduate student	B1
13	PEAK program, University of Tokyo	Undergraduate student	B1
14	PEAK program, University of Tokyo	Undergraduate student	B1
15	PEAK program, University of Tokyo	Undergraduate student	B1
16	PEAK program, University of Tokyo	Undergraduate student	B1
17	Asamushi Research Center for Marine Biology	Graduate student	M1
18	Faculty of Law, Tohoku University	Undergraduate student	B1
19	Faculty of Law, Tohoku University	Undergraduate student	B1
20	Faculty of Science, Tohoku University	Undergraduate student	B1
21	Faculty of Science, Tohoku University	Undergraduate student	B1
22	Faculty of Medicine, Tohoku University	Undergraduate student	B1
23	Faculty of Medicine, Tohoku University	Undergraduate student	B1
24	Faculty of Medicine, Tohoku University	Undergraduate student	B1
25	Faculty of Medicine, Tohoku University	Undergraduate student	B1
26	Faculty of Dentistry, Tohoku University	Undergraduate student	B1
27	Faculty of Engineering, Tohoku University	Undergraduate student	B1
28	Faculty of Engineering, Tohoku University	Undergraduate student	B1
29	Faculty of Agriculture, Tohoku University	Undergraduate student	B1

Student data (Total: 29 students)



The plan

- ▶ Staff planning and organization
- ▶ Course plan
 - Objectives
 - Simple experiments
 - Maximize interactions
 - Staff as facilitator and guide
- ▶ Outcome
 - Learning, social experience, international exposure, new environment

Summary

- ▶ A 5-day intensive, camp-like scientific experience
- ▶ Small group activities meant to include and favor interaction between international and Japanese students
- ▶ Activities performed in English and aim at improving communication and discussion between diverse group members

General objectives

- ▶ Learn about *marine biology* in English while having fun in a natural setting
- ▶ Create an opportunity for Japanese and international students to interact in an intimate way in a camp-like atmosphere
- ▶ Promote interactions with invited students and faculty from another university
 - To discuss common issues and differences
 - To explore new ways of collaborating for international education

Specific objectives

- ▶ To learn the basics of the scientific method (科学的方法) by performing simple ecology and cell biology experiments with marine organisms in small teams.
- ▶ Based on their own ideas, students will design and perform simple experiments to test hypotheses. By trial and error, students will discover on their own basic principles of the scientific process and method.
- ▶ Another important objective will be able to explain to other group members one's ideas effectively.

Overall flow



Simple plan

- ▶ After receiving a brief explanations and guidance, students will collect marine samples, plan, develop and perform various experiments, in small groups, with marine organisms
- ▶ Hypothesis generation, discussion of results and their interpretation is an important activity
- ▶ On the last day, students will present their results in a short oral presentation and prepare a short report, to be done in English

Evaluation

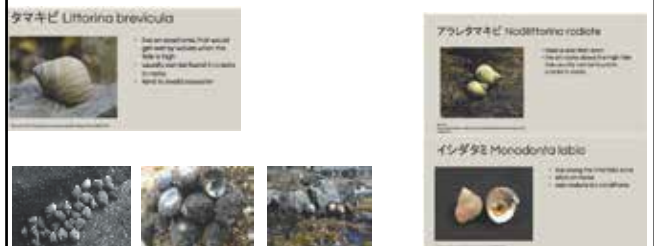
- ▶ Active participation in whole course and oral presentation (50%)
- ▶ Report (50%)

To promote student based-learning

- ▶ Provide only basic guidance about objectives and procedures
- ▶ No detailed protocol, but experimental objectives provided
- ▶ Small groups (3–4 students)
 - Instructor assigned-groups to maximize group diversity

Experimental plan (1)

- ▶ Extruding response of snails (3 species) – 貝
 - Objective: Confirm that snails respond to sea water for their extruding behavior, see how osmotic pressure and the ion composition of the sea water affect the response, and discuss how the observed effect is explained by their habitats.



Experimental plan (2)

- ▶ Walking pattern of sea roaches (フナムシ)
 - Objective: Confirm that sea roaches turn left and right alternatively when put in a maze, see what controls the walking pattern, and discuss why they do it in the natural world.



Experimental plan (3)

- ▶ in vitro fertilization and development of sea urchin (うに) embryo



Experimental plan (4)

- ▶ Plankton collection and identification



Project presentations

Group-based evaluation

Objectives of presentations

- ▶ Summarize their experience and findings, interpretation
- ▶ Confirm their understanding
- ▶ Present to peers
- ▶ Peer evaluation
 - Evaluation rubric

Report

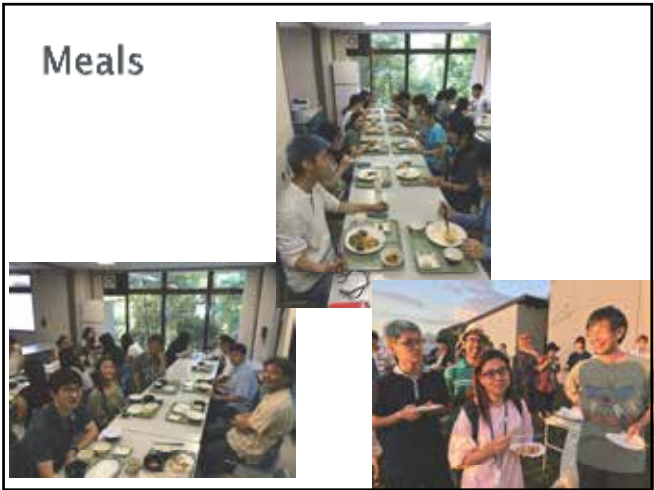
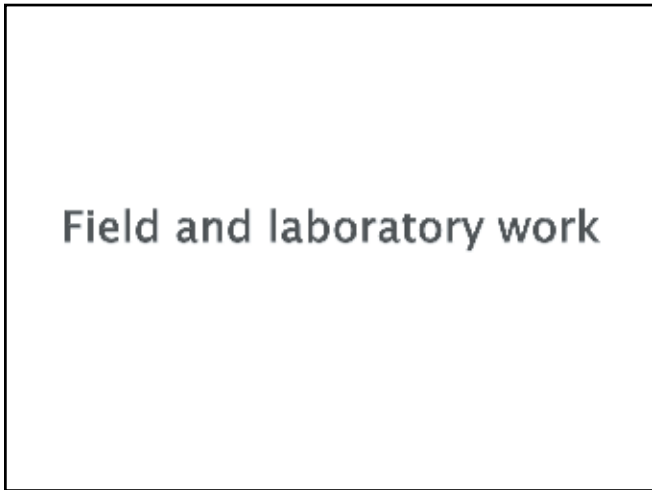
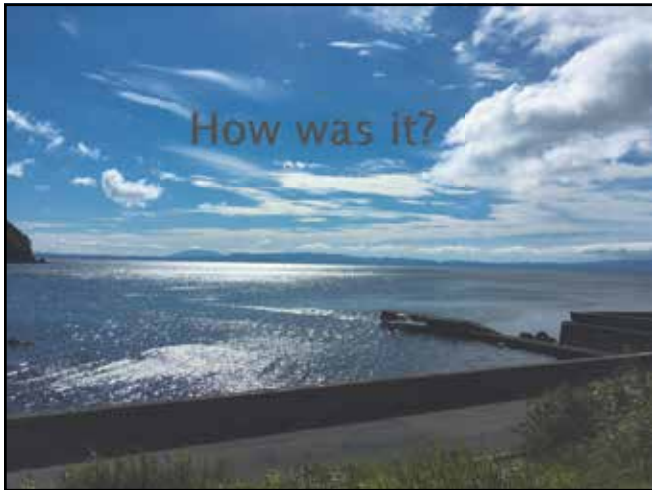
Individual evaluation

Short report (2–3 pages)

- ▶ 1) About sea urchin fertilization/development and plankton observation
 - What do you think is the main appeal of these two simple experiments?
 - What did you learn from these?
 - What is the main biological message you will keep from these simple manipulations and observations?
- ▶ 2) Student experience
 - What did you get from this whole course experience?
 - What did you learn about the scientific research process or method during the course?
 - Differences between lab vs wild?
 - Greater lesson(s)

Costs

- ▶ Transportation (covered by TU)
 - Registered seminar students can claim highway bus transportation costs
 - Sendai ↔ Aomori station
- ▶ Accommodation costs (covered by students)
 - About ¥400 sheets cleaning fee
- ▶ Food (covered by students)
 - About ¥1450 per day (three meals)
 - Or cook own (microwave)
 - Convenience store about 10-minute walk





Summary

- ▶ Out of town camp-like experience
- ▶ Student-centered learning
- ▶ International experience/exposure in Japan



基礎ゼミFDにおける事例報告 「ロシア研究入門」

塩谷昌史(東北アジア研究センター)

1

自己紹介

- * 所属先: 東北アジア研究センター
ロシア交流推進室
- * 専門はロシア経済史(経済学)
- * 本学の日露の学术交流にも取り組む

2

自著(写真)



3

本年10月に日露学長会議に併せて、
日露人文社会フォーラムを企画・実施



4

ロシアでの滞在経験

- * 1999年～2007年まで、一年の半分を東北大学シベリア事務所(ロシア連邦・ノヴォシビルスク市)に滞在
- * その後も、日露の学术交流や個人の研究で、年に4回ほどロシアを訪門
- * 通常の教員よりも、ロシア滞在経験が豊富

5

基礎ゼミの開講について

- * 2008年以降、毎年、基礎ゼミを担当
- * 「ロシア研究入門」や「国際関係の中のロシア」というタイトルで開講
- * 基礎ゼミを担当して今年で9年目。

6

授業の形式

- * 教員が前の週に、テキストのコピーを人数分用意し、それをゼミ生に配布
- * ゼミ生は、次回の授業までにテキストを読んでくる
- * 米国の大学院で採用するテキスト(コース・リーダー)をモデルに。一つのコースを網羅するテキストを教員が準備
- * 授業全体の7割程度のテキストは、教員側で予め決めておくが、3割は学生のリクエストに合わせて変更

7

授業の目的と概要

- * ロシアは広大な領土を持ち、様々な国境を接しており、日本の隣国
- * 安倍首相がプーチン大統領の来日を推進する一方で、ロシアは欧米と対立するものの、シリアを含む中東情勢で積極的な役割を果たす
- * 教員はロシア研究を専門。教員の知識と経験に基づいて、ロシアの実情をゼミ生に伝えることが、この授業の目的である。

8

学習の到達目標

- * 基本的な文献検索を習得する
- * ゼミ生同士で議論が出来るようにする
- * 自分の関心のあるテーマを選び、レポートを作成する
- * ロシアと諸外国との関係について理解を深める

9

受講生数と所属学部

学部	人数
文学部	2
教育学部	1
法学部	2
経済学部	2
理学部	2
医学部	2
工学部	2
農学部	2
留学生	1
合計	16

10

実施授業全体の流れ(第1回～第7回)

- * 第1回:オリエンテーション
- * 第2回:ロシアの歴史(1)
- * 第3回:ロシアの歴史(2)
- * 第4回:ロシアの地理
- * 第5回:ロシアの政治経済(1)
- * 第6回:ロシアの政治経済(2)
- * 第7回:ロシアの政治経済(3)

11

実施授業全体の流れ(第8回～第15回)

- * 第8回:図書館での文献検索実習
- * 第9回:ロシアの科学技術(1)
- * 第10回:ロシアの科学技術(2)
- * 第11回:ロシアの科学技術(3)
- * 第12回:ロシアの料理
- * 第13回:ロシアの宗教
- * 第14回:ロシアの民族
- * 第15回:北方領土の問題

12

使用したテキストの例(1)

- * 司馬遼太郎『ロシアについて』文藝春秋、1986年
- * H.J.マッキンダー『マッキンダーの地政学』原書房、2008年
- * 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社、1981年
- * マリン・カツサ『コールド・ウォー』草思社、2015年
- * ボボノフ『ロシア民族音楽物語』新読書社、2000年
- * 長谷川英雄『ロシアの文化・芸術』生活ジャーナル、2011年
- * 沼野充義『ロシア(世界の食文化)』農村漁村文化協会、2006年

13

使用したテキストの例(2)

- * 大崎善生『西の果てまで、シベリア鉄道で ユーラシア大陸横断旅行記』中央公論新社、2012年
- * 林幸秀『ロシア科学技術情勢』丸善ブラネット、2014年
- * 的川泰宣『月を目指した二人の科学者：アポロとスプートニクの軌跡』中央公論新社、2000年
- * 孫崎享『戦後史の正体1945－2012』創元社、2012年

14

ゼミ生に配慮した点

- * 毎回、複数のテキスト・コピーを準備し、ゼミ生全員に少なくとも2回は発言の機会を設ける。
- * 発言は、コメントでも質問、印象でも構わない
- * 15回のうち1回は、テキストの概要をまとめる作業(レジュメ作成)を行ってもらう
- * 授業の最後に「なぜ～なのか？」という問いをゼミ生に立ててもらい、4000字でレポートをまとめてもらう
- * ゼミの15回のうち、1回は図書館の司書の御協力を得て、図書館で文献検索授業を行う

15

基礎ゼミで工夫した点(1)

- * 基礎ゼミの初回にゼミ生から、リクエストを受け付ける
- * 今期のリクエストは、シベリア鉄道、ロシア音楽、ロシアのドラマであった→授業に学生のリクエストを反映
- * 文系と理系の学生が共に、ゼミの内容に興味をもてるように、基礎ゼミで科学技術の内容を含める
- * 授業の合間に、教員がロシアで体験した出来事や失敗談を話す。

16

基礎ゼミで工夫した点(2)

- * テレビ番組の録画を授業で活用。NHK・BSの番組「コズミックフロント・ガガーリンの経験」や映画「チェブラーシュカ」を授業で扱った
- * ユーチューブを今回初めて活用。ロシアの国家、ロシアのポップス(ユーロビジョン)、ロシアのアニメを流した

17

ユーチューブ活用の実例

- * ロシアの国歌
- * <https://www.youtube.com/watch?v=gbGuxo3FRvk&list=RDgbGuxo3FRvk#t=0>
- * ロシアのポップス: million voices
- * <https://www.youtube.com/watch?v=Q2gbKgICL5s>
- * ロシアのアニメ: マーシャと熊
- * https://www.youtube.com/watch?v=CSdGB_r6ZkQ&list=PL96qto3ykyyUGOYI7bs7DkKiisa5u9NC&index=1

18

レポートの表題(1)

- * 広大なロシアについて
- * なぜドストエフスキーは日本人に愛されるのか
- * 遠野物語
- * ロシアと日本の刑法の違い
- * なぜイギリスでEU離脱問題が起こったのか
- * 中露領土紛争について—なぜ領土問題は完全解決に至ったのか—
- * ゴルバチョフはソ連を“立て直した”か
- * 男と女の考え方の違い

19

レポートの表題(2)

- * なぜチェ・ゲバラは格好良いのか？
- * サハリン(樺太)と中央アジアに分布するコリアン・ディアスポラの実態の比較及び違いが生じる原因について
- * 冷戦時の主要な出来事について
- * 原子力発電所の再稼働は正しいのか
- * 大国の大学事情とは
- * ONE PIECEは何故人気なのか
- * ロシアの祝日について
- * 独ソ戦におけるソ連の勝利の理由

20

御清聴ありがとうございました

21

4. ワークショップ ―学生の主体性を育む授業方法―

A～C グループの3グループに分かれ、事例報告者を交えてグループ作業を行った。

《 ワークショップ ―学生の主体性を育む授業方法― 》

- ◇グループ作業の最初に、参加者の中から「司会」「意見発表者」「書記」を決める。
- ◇講師の実践事例報告に対する質疑応答・補足説明の時間を設け、フリーディスカッション形式で、受講学生の主体性を育む上で特に工夫した点などを確認する。
- ◇TA、ゼミ生が参加するグループでは、TA やゼミ生からも授業改善のための意見を出してもらう。
- ◇「書記」はグループ作業での検討経過等を記録用紙に記述する。
- ◇参加者全員の討議により、ゼミにおいて「学生の主体性を育む授業方法」の「良い手法 3 例」「改善を要する手法 3 例」を「司会」がまとめる。
- ◇作業成果としてまとめた「良い手法 3 例」「改善を要する手法 3 例」を「意見発表者」が全体会において発表する。
- ◇作成した記録用紙及び発表用 PowerPoint は、後日報告書として発表するため、ワークショップ会場の USB メモリに保存する。書記は、記録者の欄に必ず氏名を記入すること。

[A グループ]：(講師) 尾形 雅君	(世話役) 葛生政則 高橋慎雄
[B グループ]：(講師) Martin ROBERT	(世話役) 芳賀 満 佐藤智子
[C グループ]：(講師) 塩谷 昌史	(世話役) 中川 学 大森不二雄

◎進行予定表（15：10～17：00）

ステップ	消費時間	時刻
I グループ作業	80 分	15：10～16：30
1 イントロダクション・自己紹介・役割決定 (記録用紙記入開始)	10 分	15：10～15：20
2 実践事例報告をめぐる質疑応答・補足説明	15 分	15：20～15：35
3 討議	40 分	15：35～16：15
4 まとめ（発表用 PowerPoint 作成）	15 分	16：15～16：30
会場移動：16：30～16：35		
II 全体発表・質疑	25 分	16：35～17：00
各グループ発表	5 分×3 グループ	
各グループ質疑	3 分×3 グループ	

川内北キャンパス配置図



C棟4階

5. 発表・質疑（各グループの成果発表）

第 10 回 東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ 記録用紙

A グループ	記録者名：高木 成幸
質疑応答、補足説明 (1、2) 集中ゼミの場合 3 日間程度の時間しかないが、どのように時間割をすればよいか？ * 試料作りに時間がかかるため、尾形先生が下拵えを対応された。 * 実験の楽しい部分（主要な部分）をなるべく学生に実施させるよう工夫。 * 大学院生のフォローがあった。 (3) 実習における事故の有無、その対応？ * 危険なことを避けるようにした（ナイフを使う程度）。 * 手袋、マスク、白衣を用意した（学生は筆記用具と USB メモリのみ準備）。 * USB で顕微鏡画像を保存させた。 (4) ラップトップ PC 持参の有無？ * ミニットペーパーを使用。PC は使用しない。 (5) 顕微鏡の数？ * ひとつ。待ち時間は他の学生の顕微鏡観察の様子を覗き込む等していた。 (6) 体験学習の意義？ * 目標を加味し、座学のみ抗議を避けた。 * ミニットペーパーに意見や学んだこと等自由に書き込ませて提出させ、講義の参考にする（評価対象にはしない）。 (7) 学生の積極性に差があると思うが？ * 装置一つ、試料も一人一つに限定したのでうまく講義は回った。 * 少人数制が上手く機能した。 (8) 実習と講義の配分を変える可能性？ * 学生は実習をもっと増やすことを希望していた。 (9) 8 名限定だがどのタイミングで学生が決まる？ * 教務の方で適宜割り振りをして頂いている。 * 医学部以外も大歓迎と明記し、他学部からの参加を促した。 * 教員側としても他学部からの参加者から刺激を受ける部分があった。	

- (10) 文系学生が置いて行かれる可能性、それを避けるための対応
- * 初歩的な内容から始め、学生の好奇心をくすぐるよう工夫。
 - * 今回は理系のみだった（講義名をさらに工夫する等の可能性？）。
 - * 初歩的すぎると退屈な内容になるので、次第に高度な内容になるよう工夫。
- (11) 作業の待ち時間どのように使う？
- * 待ち時間ができないような実験を選択。
 - * 学生に標本を持って帰らせた。モノを残すように工夫。
- (12) 切片を観察するだけなら座学（写真）でも対応できるが？
- * 手を動かし、臓器を実際に触る体験が重要と考えた。
 - * 実際にミニットペーパーの感想を見ると有効であったと感じられた。
 - * 講義では写真を多用した。
- (13) 講義の後に実習だったが、講義と実習を交互にする可能性？
- * どの臓器に興味を持つのか人それぞれなので、まず講義で全ての臓器を説明した（退屈させないよう工夫した）。
 - * 臓器はつながっているので講義を途切れさせないようにした。
- (14) ミニットペーパーの使用法
- * できるものはその場で対応。難しければ先生の宿題に。
 - * 双方向性の講義にした。
- (15) 講義の目的を強調するための工夫
- * 身近な体験（実生活）と関連させて説明をした。
- (16) 初歩的な内容から始める意義、理解度に対する手ごたえ
- * 生物を勉強していない学生もいるので必要。
- (17) 全体発表会？
- * 一人が発表。前もって参加することを確認していなかったため、スライドの改良などにあまり時間が取れなかったのが反省点。
- (18) 反省点？
- * 多様な臓器を対象にしたため、詰め込みすぎの可能性があったかもしれない。
 - * あえて失敗体験をさせた方がよいかもしれない。
 - * デューティを与えた方がよかったかも。ただし多すぎると難しい。

(19) 学生が寝ていたらどうする？

＊いままではいなかった。が大きな声を出す等で対応したい。

Aグループ 発表用パワーポイント用紙

発表者名 井泉 知仁

良い手法

- ・ 成果物（プレゼンを含む）を伴う実習形式
- ・ 目的意識や意義を明確にした身近なつかみ
- ・ ミニットペーパーを用いた学生と教員との双方向性

改善を要する手法

- ・ 講義では、教員からの知識伝授
一辺倒に陥りがちにならないように
- ・ 詰め込みすぎない（内容を過剰にしない）
- ・ Duty を増やしすぎない

第 10 回 東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ 記録用紙

B グループ	記録者名：丸岡 大佑
Q. 典型的なトラブル？ A. (トラブルというよりは改善事項?) 6 月に足の怪我。8 月に参加したが、フィールドは起伏があり移動が困難な場合があった。 A. この基礎ゼミでは英語を使うことが前提にされていたが、グループでコミュニケーションが円滑な場合とそうでない場合がある。学生の英語のスキルについて事前には知らなかった。 Q. 学生の発表は英語？ A. 英語。グループで分担して発表する。 Q. 各方面からきている学生の受け入れ基準 (全員受け入れたか?) A. 20 人が規定だが、今年度は 25 人受け入れ。→21 人。3. 4 人のグループに分ける。キャパは 30 人。 Q. 基礎ゼミに際して、学生に事前に (フィールドに行く前に) 情報提供はどの程度あったか？ A. ある程度は資料配布 (スライド形式)。渡せる情報には限りがあるため、グループごとにテーマを絞るなど対応 (フナムシ、貝、蟹のグループ)。 Q. 実験を主に行う予定の基礎ゼミの場合、予備的に学習が必要だと思うが、両立できるか？ A. この基礎ゼミは分子生物学の分野だが、内容はフィールドワークも行っており、専門的なことまでは難しいかもしれないが、基礎的なことは対応できるのでは。 Q. 学生は PC 持参？ A. 特に決めていなかったが、グループに 1 台は持参があった。また学習場所には一応ある。ちなみに新入生の 95% は PC を持参しており、確率的には問題ないのでは？→スマホが統計に入っていれば、対応できない？→ソフトもある？ Q. 費用はかかる？ A. 6 日で 8000 円未満。 Q. この基礎ゼミは 8 月開講だが、ほとんどは 4 月開講。何もわかっていない新入生はついてこれるのか？モチベーションの格差は感じたか？	

A. まず8月に開講している理由は、受け入れ先の予約状況のために、4月の時点で募集が難しい。

格差がある場合は確かにあるが、この基礎ゼミではフィールドワークも含んでおり、モチベーションを上げる動機はいくつか用意できているのでは？それよりもコミュニケーションに苦労した。

杉本先生→第5希望の学生もいたが、何度かやっていくうちにモチベーションは上がった。

また、4月時にはわからない人はいるので、図書館検索や座学を入れて開講している人もいる。

Q. 人気の基礎ゼミは学生の希望は第1ばかりなのか？

A. 正確にはわからない。

Q. 学生の自主性はどのように考えているか（どこまで任せて、どこで指摘するか？）

A. 基本的にはまかせて、あるところで質問を出す。学生自身が考えて、答えをだし、進めていく

杉本先生→専門的なことではなく、学習の仕方を教えるようにする。

たとえばフナムシの迷路を作ったことがあるが、元は学生自身が考案。学生が選択したゼミを専門にするわけでない。

Q. 成績のつけ方？ また参考書に関する成績評価があるが、これは何か？個人の成績のつけ方？

A. まず発表を行わせている。発表はグループとして評価、特に発表は学生同士の相互評価もする。それ以外にもレポートとして個人の評価を行っている。AA、Aが多くなる傾向にある。参考書に関しては不明。

→学生同士の評価は、学生の評価は適切に行えるのか？→難しいところもあるが、フォローも可。

Bグループ 発表用パワーポイント用紙

発表者名 関 剛斎

良い手法

- ・プレゼンテーションを学生にしてもらう。(プレゼンの仕方を学生自身でディスカッション)
- ・学生同士の相互評価。評価基準を示すのが重要。
- ・知識と体験のリンク。
- ・与えるテーマはシンプルに。
- ・グループワーク (少人数)。

改善（留意）を要する手法

- ・学生の思考を促すガイダンス。
- ・発表の形態にとらわれる必要はない（枠を決める必要はない）。
- ・自主性の引き出し方。
- ・グループのバランス。

第 10 回 東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ 記録用紙

C グループ	記録者名：林 雅子
【実践事例報告に対する補足説明】 ➤ 基礎ゼミの人数は想定を上回る場合も下回る場合もある。 ➤ 専門が違う他分野からも呼び込めるシラバス作りが大切である。 ➤ 文系の学生だけより理系の学生も入ったほうが、ゼミが活性化する。 ➤ 他分野の学生と連携し、接する希少な機会であり、情報交換・交流の機会となる。 【実践事例報告に対する質疑応答】 Q. 科学についての講義 3 回を実施したきっかけは？ A. 現代でも歴史的にも社会を変えるものは技術であり、社会自体は文理分かれていない。 Q. 理系からの学生に対応した講義内容について A. 米ソ冷戦のロケット技術競争、軍事における技術進歩などについて、文献輪読と NHK BS ドキュメンタリーの視聴。 Q. 文理学生の交流は？ A. 雰囲気よかった場合、リーダー的存在の学生を中心に連携。 Q. 学生の準備や負担が大きい、やってこない学生はいるか？ A. 読んでこない学生はいるが毎時というわけではない。 ⇒その場合、先生やレジュメ担当の学生が説明する。 Q. マッチングの方法や度合いは？ A. 4 月入学後、基礎ゼミリストとシラバスを見て選択する。 A. これまでロシアに関心がない学生はいなかった。 Q. 担当学生はどのように決めていたのか？ A. 名簿順に一人一回。質問や発言は名簿にチェックして網羅的に。 Q. 学外との協力について、東北大学以外から招聘した場合の謝金は？ A. 交通費のみ支給される。 Q. 4 月に新入生にテーマを直接紹介する機会はあるか？ A. ない。シラバスのみから選択する。	

【学生の主体性を育むための良い手法】

1. 学内外のリソースを利用する

- 図書館など他のリソースと連携する。文献検索、レポート指導（＝誰かが指導しなければならない大切なこと）
- 視聴覚教材を活用する。⇒テキストだけではなく YouTube を活用する。

2. 予習・復習をさせる

- 過大にならない程度で、かつ纏まった量の文献の予習を、担当学生を決めて実施する。
- ミニテストで始める。

3. 学生の関心に合わせる

- 授業の 3 割は学生の関心に合わせる。
- IT、統計などを利用する。⇒研究への具体的技術が高まり、満足度が上がる。
- 理系の学生にも内容面で配慮する。

4. 学生が問いを作る

- リサーチクエスション課題解決型の授業。
- 未知との遭遇⇒関心、理解度、満足度が向上する。

【改善を要する手法】

1. 目標設定を明確にする

- 科目設定が曖昧で、目標の具体性が乏しい場合、学生間の意見交流がうまくいかなくなる。
- 目標、ロードマップ、最終的成果がないままだとやる気が失せる。緻密な設計が必要である。
- 「何のために」を明言し、求める学習の焦点を不明確にしない。

2. 学生のニーズに合わせる

- 学生の関心への配慮や学生への動機づけが必要である。
- 説明の際、自分の興味に走ってしまいがちなので、気を付ける。
- 文系の授業内容の場合、理系の学生も参加しやすいような内容を盛り込むなど配慮が必要である。

3. 講義調にならないようにする

- 自分の専門分野に立ち入りすぎると他分野の学生には入りにくい。
- 一方的講義調にならないようにする。
- コンテンツの過度な使いまわしはせず、毎年新しい内容を加える。

- 結論ありきの態度や誘導的態度は学生に伝わる。
- 学生の関心を考慮して文字以外のコンテンツも取り入れる。
- 振り返りや復習をしないとその場の活動に留まってしまう。
⇒アクティビティ、予習、振り返りなどを取り入れる。

4. 評価方法の検討について

- 成績の基準を明確化して評価の公平性を保つ。
- 数値化の利点と欠点。
⇒発言、レポートの評価基準の明確化
⇒逆に、行動が拘束され自由度がなくなる。
- 評価の不平等感を無くし、他のゼミとの共通性が必要。
評価が厳しすぎたり、過度に負担になる課題を課したりすると、受講生が基礎ゼミの他の授業と比較した際に不平等に感じる可能性がある。
- 講義に対する理解度の指標策定。

5. 詰め込み過ぎについて

- ワークに時間を割くと振り返りの時間が持てない。
- やりっぱなしにならないようにする。
- 宿題・課題の質と量の決定が重要。
- 余裕を持った授業設計。集中力への配慮。

6. 事前の情報提供

- シラバスで事前の情報提供を充分に行う。

【まとめ】

1. 良い手法

- 学内外のリソースを利用する
- 予習・復習をさせる
- 学生の関心に合わせる
- 学生が問いを作る

2. 改善を要する手法

- 目標の明示が必要
- 評価方法の検討
- 詰め込み過ぎない
- 事前の情報提供を充分にする

良い手法

- 学内外のリソース
 - 検索スキル、アカデミックスキル
 - 映像活用
 - 他組織との連携
- 予習・復習（振り返り）
 - リーディングアサインメント
- 学生の興味に合わせる
- 学生が問いをつくる
 - 大学は未知と出会い、問う場所である

改善を要する手法

- 目標の明示
 - 何のために議論するのか
- 評価
 - ゼミ内の公平感
 - 他のゼミと比べた時の負担感
- 詰め込みすぎ
- 事前の情報提供

6. アンケート集計結果

第10回東北大学

「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップアンケート

今後の「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD を計画するうえで参考と致しますので、アンケートにご協力をよろしくお願い致します。

◇ 1 から 6 の問いについては該当する数字を○で囲み、ご意見のある方は自由記述欄にお書き下さい。

1 基礎ゼミ又は展開ゼミ担当経験の有無についてお聞きます。

1. 初めて 2. 1回経験 3. 2回以上経験

2 今回のFDで知りたかった、参考にしたかった内容は何ですか。当てはまるものすべてを選択してください。

1. 初年次学生への対応 2. シラバス作成のポイント 3. 授業テーマの設定
4. 授業の組み立て方 5. 「学びの転換」の育み方 6. 「主体性」の育み方
7. その他（具体的に）_____

3 オリエンテーションでは、基礎ゼミ及び展開ゼミの意義や実施上の留意点等を確認できましたか。

1. できた 2. どちらともいえない 3. できなかった

自由記述欄（具体的に）_____

4 「ゼミ実践事例の報告」では必要な情報を獲得できましたか。

1. できた 2. どちらともいえない 3. できなかった

自由記述欄（具体的に）_____

5 講演「配慮を要する学生の理解と対応」では必要な情報を獲得できましたか。

1. できた 2. どちらともいえない 3. できなかった

自由記述欄（具体的に）_____

6 ワークショップを通し、ゼミを設計し実施するための情報が獲得できましたか。

1. できた 2. どちらともいえない 3. できなかった 4. 参加しなかった

自由記述欄（具体的に）_____

7 次の点についてご回答ください。(1)FD への参加により学んだこと、(2)課題として残されたこと、は何ですか。また、(3)今後、提供して欲しい情報は何か。

(1) _____

(2) _____

(3) _____

※アンケート結果 基礎ゼミ FD 参加者数 64 名。回答者数 32 名。
以下、【】内は回答数と回答者数に対する割合（％）。

第 10 回東北大学

「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップアンケート

今後の「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD を計画するうえで参考と致しますので、アンケートにご協力をよろしくお願い致します。

◇ 1 から 6 の問いについては該当する数字を○で囲み、ご意見のある方は自由記述欄にお書き下さい。

1 基礎ゼミ又は展開ゼミ担当経験の有無についてお聞きします。

1. 初めて【21(66%)】 2. 1 回経験【6(19%)】 3. 2 回以上経験【5(16%)】
4. 無回答【0(0%)】

2 今回のFDで知りたかった、参考にしたかった内容は何ですか。当てはまるものすべてを選択してください。

1. 初年次学生への対応【14(44%)】 2. シラバス作成のポイント【4(13%)】
3. 授業テーマの設定【9(28%)】 4. 授業の組み立て方【21(66%)】
5. 「学びの転換」の育み方【11(34%)】 6. 「主体性」の育み方【17(53%)】
7. その他（具体的に）【2(6%)】 下に記載。
8. 無回答【1(3%)】

自由記述欄

- 他の先生方の授業方法など。
- 大学側の基礎ゼミの方針。

3 オリエンテーションでは、基礎ゼミ及び展開ゼミの意義や実施上の留意点等を確認できましたか。

1. できた【29(91%)】 2. どちらともいえない【2(6%)】 3. できなかった【0(0%)】
4. 無回答【1(3%)】

自由記述欄

- 学生の能動的な参加をひき出すこと。
- 授業で参加できませんでした。
- 芳賀先生のプレゼンが非常に興味深かった。

4 「ゼミ実践事例の報告」では必要な情報を獲得できましたか。

1. できた【29(91%)】 2. どちらともいえない【3(9%)】 3. できなかった【0(0%)】
4. 無回答【0(0%)】

自由記述欄

- 15 回全体の設計における、カンとコツ。

- 最後の方の発表のみ聞けました。
- どの先生も、学生のわからなさの理解と興味の喚起の工夫に長けていると思いました。

5 講演「配慮を要する学生の理解と対応」では必要な情報を獲得できましたか。

1. できた【26(81%)】 2. どちらともいえない【5(16%)】 3. できなかった【0(0%)】
4. 無回答【1(3%)】

自由記述欄

- 注意を要する学生への対応、特にトラブル・リスク回避の方法、留意点。
- もう少し具体的に。注意することまではできても、何ができるかわからない。
- 授業で参加できませんでした。
- 「発達障害は、問題が生じなければ障害でない」という点が勉強になった。

6 ワークショップを通し、ゼミを設計し実施するための情報が獲得できましたか。

1. できた【26(81%)】 2. どちらともいえない【2(6%)】 3. できなかった【0(0%)】
4. 参加しなかった【4(13%)】 5. 無回答【0(0%)】

自由記述欄

- 15回全体の設計における、カンとコツ。

7 次の点についてご回答ください。(1)基礎ゼミ FD への参加により学んだこと、(2)課題として残されたこと、は何ですか。また、(3)今後、提供して欲しい情報は何か。

(1) 基礎ゼミ FD への参加により学んだこと、は何ですか。

- 基礎ゼミの意義。
- 学生に興味を持ってもらうこと。
- 基礎ゼミの全体像、イメージ、具体例。
- 理系分野の先生方の工夫を知ることができた。
- ゼミの組み立て方の要点。
- 授業実践例に基づく良い例。
- 授業改善の可能性はまだまだあるということ。
- 授業の組み立て方。
- 学生への対応。

(2) 課題として残されたこと、は何ですか。

- テーマをどのように設定したらいいのか。
- 内容の量、評価法。
- グループに分かれてからのワークショップのつくり込みが甘い。
- 学びの転換に関する様々な教員間のコンセンサスの形成。
- 発表の仕方を工夫する。
- 他組織との連携をどう進めるか？
- 配慮を要する学生への具体的な対応方法。
- 13:00-17:00 は長い。
- ゼミ事例の聴講。

(3) 今後、提供して欲しい情報は何か。

- 成功例の体験集。
- 学生アンケートの自由記述などの紹介（良い授業、悪い授業、両方について）。
- 様々なグループワークの工夫（具体的な進め方等）。
- ゼミ体験の共有。
- 時にありません。
- ワークショップ内で、過去に担当したことのある先生のコメントなど。
- 配慮を要する学生への具体的な対応方法。

編集担当：東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 葛生政則

IEHE Report 69*

第10回東北大学「基礎ゼミ」「展開ゼミ」FD・ワークショップ－報告書－

2017年（平成29年）2月 発行

東 北 大 学 学 務 審 議 会
東北大学高度教養教育・学生支援機構

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 TEL 022-795-7551

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/>

*No.55 以前は CAHE TOHOKU Report として刊行

